毎月十日廿五日發行

家庭雑誌

壹冊 定價金五錢



明治二十九年八月十日發兌

第八拾參號

大改良

每月二回發行



一日 十五日

大改良

第八年 第十五號 八月一日發兌

價一冊五錢郵稅一錢半年分七拾錢
一年分壹圓卅五錢

口繪 頼政神輿ヲ拒ケ圖 極彩色石版畫 梶田半古氏筆 同 鎌倉江之島眞景 ○支那海ノ海賊

寫眞銅版

◎小說大男 文界ノ隱士吟秋稚ノ筆奇想天外ヨリ落ツルモノ

水泳 極メテ簡端ナル方法ニテ水泳術ヲ知ルヲ得ベシ

支那海ノ海賊 ハ恐ロシキ實話ナリ

馬車ノ沿革ハ一千餘年ヲ經テ今日ノ形ニナリタルコトヲ圖ニ據テ詳說セリ

ベースボール 家外ノ遊戲トシテ趣味多クシテ且ツ躰育ニ尤モヨロシキ此術ヲ殊ニ委シク說明セリ筆者ハ第一高等學校ノ實地演習者ナリ

楠木正成傳ハ太華山人ノ筆號ヲ逐フテ漸ク佳境ニ入ル

◎幸福指環 頗ル妙味ナル佳話ナリ

補色ノ遊戲 コレ最モ奇々快々遊戲法ナリ

ロンドン博物館縱覽記 此他動物ト音樂ノ奇話アリ

文林 例ノ如ク賑ハシクコトニハ本號ヨリ少年發句ヲ掲ゲ出セリ

第十六號豫告 八月十五日發兌

極彩色石版口繪 余吾湖畔の二勇士 寫眞亞鉛版二頁 大海嘯後慘狀の圖 海嘯地探撿家梶田半古氏筆 惻々愁殺

記事は休暇中の仕事は何を爲すべきや されんげん氏の傳記 びすまあく生の學時

凹凸鏡 影の 昆蟲博士 歷史名數は武將學者等一切の四天王を詳悉し 臺灣數字 及び臺灣のアイサツ語類

赤襟娘さやんま船は共に高尚優美の小說にして 象牙色付法さ罐詰三法は共に實驗し得べく

其他海嘯記事大全さして今回の海嘯の始終を一括して完全なる被害地たらんを期し聖恩の優遊、外人內人の義俠、官吏の信員の奉公、大地圖、波動域內、前兆の俗傳、遭難者の實話、懇話進救狀の實見談、性狀、漁夫の大幸、餘波聖影奉戰事件等、何れも部門を分けて類集詳說すべし文添例の丁寧なるは、世上の注意をひくに至れり。

文林は匿名懸賞文の作者を報告し新に文懸賞文題を出して募集す。投書

發行所 東京神田錦町二丁目五番地 學齡館

發賣所 東京京橋區[illegible]屋町十四番地 北隆館

明治廿九年八月十日發行

家庭雜誌第八拾參號

目錄

家庭雜誌第八拾參號

（明治廿九年八月十日發兌）

社説

如何にして炎暑を過ごさん

冬と夏とは一年の行路に當る險はしき坂なり。老人、小供、病身者は此の坂を踰ゆるとなか〳〵大儀なり、中には坂の頂上に達せざる前に倒ほるゝあり、頂上を踰へたる後に倒ほるゝあり。冬と夏とに病人の多きは統計の明に示す所にして疑ふ可らず。今や炎暑焚くが如く重荷引く馬の道に斃ほるゝもの一日に幾何なるを知らずといふ程なり。腦髓も使はぬ倔强の動物すら斯く耐へ難きに、まして身躰と與に心神を勞する人間に於ては病なくして、此の夏を過ぐるは何よりの幸福なる可し。然らば如何にして此の險はしき坂を踰ゆ可き乎。海水浴か、温泉か、將た風通しよき高樓か。是等は夏を凌ぐ一方なる可しと雖、その主なる方法にはあらず。假令一家擧りて海水浴に赴きたりとするも、夫婦喧嘩、嫁姑の口論一日も絶へぬならば冷潮は熱湯のみ、清風は毒瓦斯のみ、身は大磯の濱、箱根の谷に在るも、決して面白可笑しく夏を過ごすと能はじ。只一日なりと、一週なりと、一月なりと慣れたる生活を離れて、新らしき生活を田舍に取る時には、平常癇氣强き主人も大氣になり、小言多き姑も寛大になり、沈欝なる嫁も快活になり、新なる生活に依て、新なる人の如く變はるとあるを以て、海水浴などは夏を過ごすに最も妙なるのみ。即ち夏を過ごす爲めに、肉躰の慰も、必要なれども心の中より煩はしき思も去りて、重くろしき荷物を卸ろし、輕く快く樂く、暮らすとこそ、消夏第一の法といふ可けれ。

新聞紙の報ずる所によれば本年は、特に暑氣の爲めに

發狂する者多しといふ、是れ取りも直ほさず、消夏第一の法を忽緒にしたるの結果ならんのみ。身躰は弱りて、百里の路を行きたらん如くに疲るゝに當り口よりは火焰を吐ひて爭ひ、果ては攫み合ひ、組打となり、汗膏沸くが如く、一日たりとも安き心なからんには心神は勢頽倒せざるを得ず。然らざれば、肉躰病を生ぜざるを得ず。是れ自然の道理にして、如何ともす可らざるなり。吾人は夫婦喧嘩や、嫁姑の口論若し是非共爲さねばならぬならば、春秋二期にせよといふそのにあらずと雖、夏冬、特に夏には勘忍して、遠慮して、一家の平和を保たんとを望むものなり。

一家平和なれば、假令九尺二間の裏屋に住むとても、夏は凌ぎ難きにあらず。老人の笑聲は、冷風よりも一家の慰となり、小兒の高笑は、海水よりも夏を忘れしむ可し。陸放翁が夏を詠ずるの詩に『斗酒隻雞人笑樂、十風五雨歳豐穰、相逢但喜桑麻長。欲ㇾ話窮通已兩忘。』一家歡樂の中には、窮通兩ながら忘る可し、況んや炎暑をや。

炮烙贊

一生をつくろひなくその日くらしに覚へたる炮烙といふものは、圍爐裏のもとにいやしまるれとも、その德を論すればいとたうとし、鍋釜は眷族も多くわかれて、藥鍋など號するは銀に毛彫の縁にほこり、數寄の茶釜は天明芦屋の作にたうとまれ、探幽が下繪にあたねを高ふれは、釜所の太郎次郎もをのづから氏族の榮に心おこりするなるべし、炮烙は一類もなく世にかゝつらふほたしももたす、盧仝が夜なへに茶をほうして雨夜のさひに伴ひ、炙鑒の豆のからからとなる時は隣のやもめの耳を悦はす、いてや是を荷なふ商人は程朱の説をきかされとも、常に身をつゝしみて細道假橋を大足にはこはす、市中に股をくゝれとも、ふかくいさかひをたしなめは、馬士舩頭の氣隨には似ざらん、なけくべきは本間の狂言に羯鼓と威勢をあらそひ、又は歐陽公か工夫とり鍋といふものを、尻にぬられて蠅をとる道具となれるは、をのか心にもあらてにけなきわさなから、かのあし鼎の醉狂人の鼻をかゝし、石川五右衛門か釜いりより論すれは罪は至て輕かるべし、まして〜ろに和田殿の大磯かよひに頭巾の名に物すかれてより、今に老人の寵愛にあひて、常にきんかあたまにいたゝ

かゝれは、かれは藥罐の下に立む事かたくなんありけろ、
ほうろくや棚から下りる秋の暮。　（也有）

科學

象

松ヶ枝女史

上野の動物園に行つて御覧なさい大きな象がその不思議な鼻で藁など持ち上げては口に入れ面白き樣を演じて居ります容姿こそ隨分不恰好でありますが象は性質至て温順な且つ怜悧な獸で馴らしまするど小さな子供など例の鼻で自分の背上に載せ上ぼせて人が付き添ふて居りませんでも結構子守りを致て居ります。

象は、犀、貘、馬、豚等と同樣厚皮獸に屬しますが中でも犀と象とが最も厚い皮を持つて居るのです。

象を見て一番氣に付きますものは鼻でムいましやう何故あんな奇妙な鼻が付て居るのでしやう。

象の頭は分外に大きく重くムいますからもし他の獸のやうに然るべき長さの頸の先きに頭が付くと致しますると頸に非常な筋力がなければ頭の重さを支ゆるとが出來ません頭の至て短くて恰ど頸が無いといふ程の有樣はこの困難を避けんが爲めです而して頸の無い代りに鼻の形狀作用に特別な處がムいます。

總じて草やそのほか凡て地上或は地に近い處にあるものを餌食とする四足獸は脚を屈しないで口を地に付けるやうにする爲め頭は前脚の長さに適合した長さの頸に付て居りまするが象のやうな滅法に大きく重い頭では到底地に下げたり付けたりするとが難いので即ち鼻に奇妙な作用が起つて居るのです麒麟などゝ云ふ獸は前足が至て長い丈に頸も誠に長くその先には小さな輕い頭が付て居ります。

象の鼻が樣々な動作をする事が出來るのは何故でしやふ象の鼻は腱と共に誠に多くの筋から成り立つて居が

爲めでムいますこれらの筋は鼻の內外の蓋皮に込み入て樣々の方向に伸て居りますあるものは縱にあるものに橫に又あるものは殆ど圓線のやうな工合になつて。」

この鼻一個の筋の數は四千より少からぬと申まするから人身の凡の筋數を合せたよりも數倍多いとでムいます鼻の中は分割線のやうなもので分けられて恰も二つの空洞を造つて居りますが先きの方は動く釣のやうに曲がつて居ります。

象の鼻は誠に造化の一奇蹟とも申べきものに思はれます呼吸もこれでするかと思ふと食物を口に運ぶのもこの鼻で致します、曲尺八尺ほどもある長いこの鼻は感覺誠に鋭くて象の大きな軀に似つかはしく付て居ります、大な木を根拔きにするかと思ふと小さな草をかき集めたり大砲を持ち上げたり小さな木の實を拾ふたり人を殺すかと思ふと蠅一つも追ひのけたり誠に大小嫌ひなく不思議な働を致します鼻孔で多量の水を吸ひ上げまして反曲してその大きな喉から飲み下したり又は鼻先を頭の上の方に向けて五軀に水を灌ぎかけなど致します。

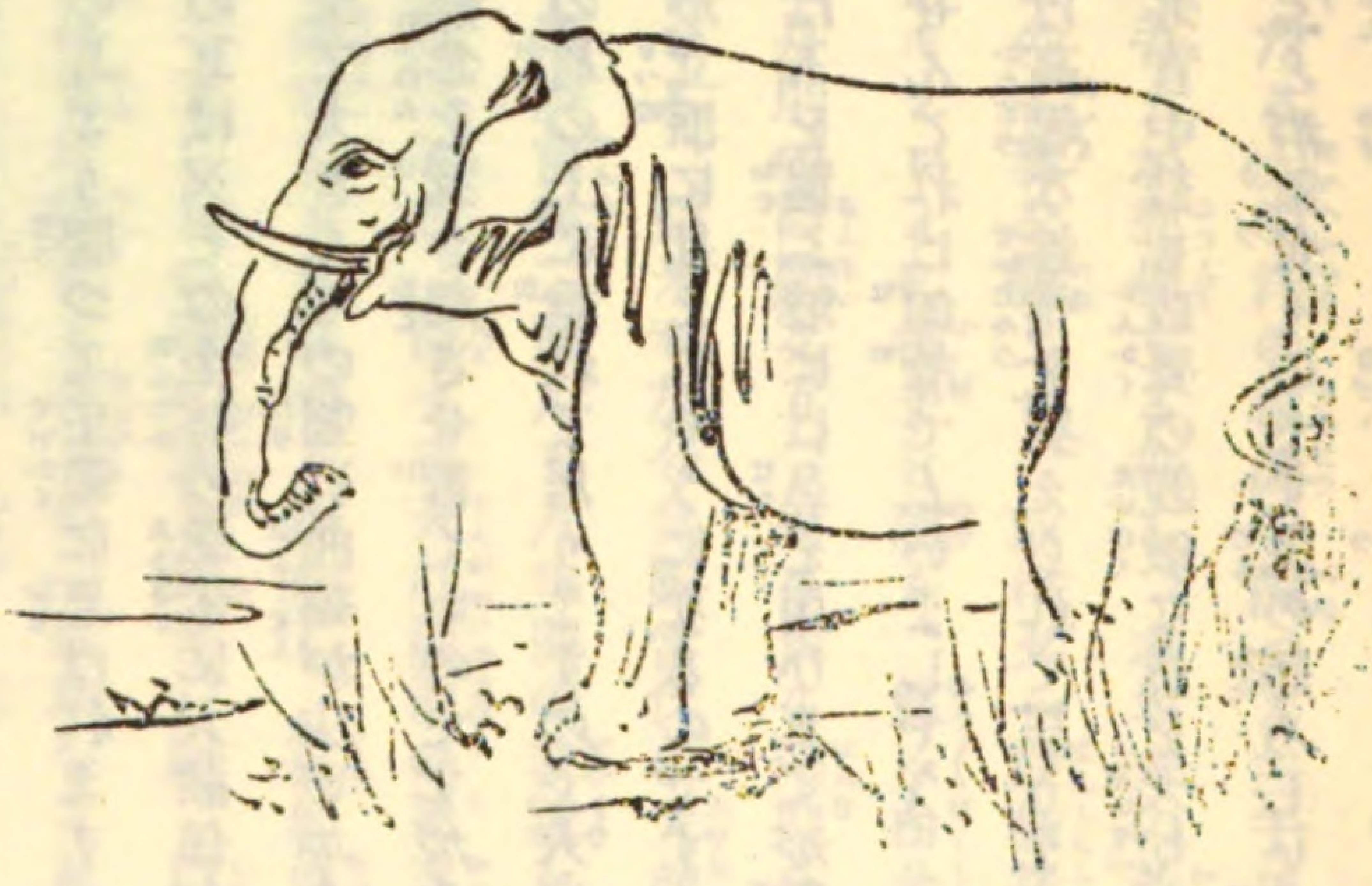
象に牙のやうな長い尖つた大きな齒のあるのは何の爲でしやう。

これは防禦の武器とも云つべきものでその當り難い堅固な基底に非常な力があるのと曲げたり撓めたりするとが出來る鼻との關係はこの牙のやうな齒は充分の動作を務むるのですこれが防禦の器といふ鑑定をなぜ付くるかと申せば牡象の牙が牝象のよりは勝れて大いからで即ち反芻獸（牛等の類）の角に於けると同じ理でムいます。

象は鼻を防禦の武具として用ゆる事は至て稀で通常この牙を用ひて居りますその生活して居ります國の深林など行るきまはるときにこの牙もて木を拔き上げ茂つて居る枝を嚙み仆して以て自分の行く道を造りますそ

うして顔や鼻に創の付かぬやうにするのですこの牙は虎や恐ろしい犀などを追ひ退ける武具となります。

象の眼が著るしく小さいのは何故でしやうか。



眼の小さいのは象が木の枝を折り仆したりする時に害を受くるとの少からん爲めと象の生産地なる熱帯地方に夥しくありますうるさい昆虫の襲撃を避くるに安全な爲めとでムいます。

又象の眼は只だ小さい計りで安全な防禦となつて居るのでなく瞬きするとの出來る膜で以て支えられてあるのですこの膜は鳥に付て居るのと同じやうな理のもので通常の瞼ではムいません眼に落ちて來る害物を防ぎ退くる爲めに特別に付て居りますので眼を閉ぢる爲めのではムいません。

象の耳は何故あんなに特別に大きいでしやう。

凡ての動物に於ける外耳の官能は音響の傳達を捷徑にする爲めでムいます、通常木の嫩芽など食ふて生活して居る動物は枝や葉のがさつく音で屢々聽くべき音響を聞き外すとがムいますから外耳の大きいのは遠方の音響を聞き取るに便利を與ふるのです象の耳は鼓膜も凡ての外の機關も皆人や他の四足獸より勝て大きくて鼓膜の筋の繊緯の排置も亦異なつて居ります象の耳は他の動物よりも遙か遠くの音響を聞くとが出來て樣々

な場合の出來事から推考して見まするにその聞き方も人の耳より勝つて正確に思はれます。

象の耳は又その全躰の風采に大關係がムいます象の躰は至て大きくその割に曲線が少いから一見誠に美といふ觀念を惹き起させ苦くいのですが大きな耳が優しく兩の肩の上に垂れて居りますので大に風采を擧げて全躰が立派に見えるやうになるのです。

象は人を襲ふ時には鼻を用ひますが虎には決して用ひませんこれは何故でムいましやう。

象は高等な性情を與えられて居りますから直ちに自分の外官中最も感覺の鋭敏な鼻を大切にせねばならぬといふことが氣付くのです虎の恐ろしい爪を一撃の下にこの感じ易い鼻を傷け、劈んざくといふことを知つて居りますから虎にかゝる時は決して用ひませんが人には恐れません。

象は猛獸が自分の鼻に飛びかゝりはしないかと非常に恐れて居りますそれ故死んだ虎でも象の前に見せますと直ちに鼻をじつと頭の上の方に上げてしまひます。」

象の後脚は膝の關節で前の方に屈する事が出來るやうになつて居りますのでその大きな五躰を自由に提く起臥さすることが出來まする。

よく馴された象は凡ての動物中で最も温順な敎ひ易い可愛らしいものでムいます、自分の主人によく從つて主人を愛することも深ふムいますよく樣々のしるしを見分け付けますし人間の聲の種々なる音調の區別を覺ります縱令ば怒りの音調、賞賛、命令などそれ〲よく聞き分けます。

象はよく恩に感じまするし寛大で情も深ふムいますその智慧に於きましても樣々なる面白き話が傳つて居ります。



史談

くりーぶらんどの妻

中野三鷹子

渺々たる太平洋の浪濤を隔つる三千里、大日本の地に於て吾人が想像する如く、本年末の改選に果して第三回目の名譽を擔ふや、或は又一般新紙の傳ふる如く、マッキンレイに椅子を讓り、悠々白舍を辭し去るや、そは是別の問題なり、兎も角も任期今や滿つるに垂なんとせる、亞米利加合衆國當代の大統領、クリーブランド氏が前後二回凡て八年間の政蹟を、今日にしてたどり見ること、例へば天涯漂泊の孤客筇を峠の頂きに立て過來し方を見やるが如し、雲に聳ゆる何某の山はかつてましらの聲に腸を碎きし處、白いふを晒す三千丈末は天に連なる何某の川はかつて其つかれたる足をすゝぎし處、一村茂る若葉の森、あばらや集ふ何某の村、いつれか回想の種ならざる、されども斯の如く一々に其を調べ見ん事は、寧ろ政治學者の事にしてもとより家庭の事にあらず、故に余は前號に於て初代大統領が夫人を記せし筆を洗ひ、玆に又當年のミスホルソム（Miss Folsom）如何にしてクリーブランド夫人となりしや、其一斑を卿等に語り、併せて其性行をもつげんと欲す。

ワシントン夫人の傳を讀むが如き面白味とては決してなし、固よりも彼れは木枯しのふきすさぶ冬の山の如き戰爭の時、是は終日のたり〳〵とせる春の海にも似たりける無事の日、同質の人といへども必ずや時勢に制せられて、相違せる擧を示すべし、ましてや彼れは、彼れはすでに人に嫁ぎて子まで設けし世事熟練の寡婦、是はまだ若草うら若き妙齡の處女、殆んと正反の人を以て正反の時に處す、記傳其趣きを異にせる、もとより然るべき事なり。

今は早過きし昔語なり、クリーブランド氏の未だバファロー市にありて代言の職に從事せし頃、日に幾度も／＼そが事務所に來りて或は肩に飛びつき手足にまとひ、おぢさん／＼とて《Uncle cleve》いと馴々敷遊び戲れし小娘あり、ク氏も亦さながら吾子の如くに惠しみ、うるさしとて時々是を叱る玄關の書生をなだめし事さへありきと聞く、其軒つゝきの家に住し溫和順良ク氏と日頃の交はり深きホルソムといへる市人の長女、名をフランクといふ。《男の樣な名なり後に到てわかるべし、疑はすしてつぎを讀むべし》誰か知らん此小娘こそ後のクリーブランド夫人なりとは、誠に／＼はかるべからざるは人世赤繩のつながるところ、不思議なりといふ事、これについても思ひ出さるれ。《さればこそ年三十に近く相違し、一見父子の如しとはかつて吾國の新紙にもかゝれ、今猶人々の記憶に殘れり。」フランク幼年の頃はブレッカー夫人の司とれる、小學校に入り、卒業の後進んでメヂナといへる地の高等小學校に通ひ初めし時、父ホルソム偶然病に倒れしかば、母は娘を伴ふて學校所在の地に移りいとさゝやかに暮しけり、其時學校に於て屢々フランクの名を誤まりて男子の中に編入せり、少女はそをいとも／＼耻かしとて、名をクラヽとこそ改めたり《是父の死して後今に至るも交り今にかはる事なき、ク氏の頭字をとりてつけしものと知られぬ、されば其ク氏を慕ふ溫かき情は此時已に心の底に蟠りしなり、されども是所謂ラブなるものにあらずしてたとへば幼子の父を慕ひ母を戀ふるが如き情なりし事や疑なし》

高等小學校の課業を卒へて、ウエルスコレッヂに入りし時は已に優しき乙女となり、天の成せる麗質いよいよ揚れり、されば又ク氏も唯何となく相見んことを深く樂しみ、クララも亦ク氏を見るを此上なく喜び、必ずや／＼毎週一度、休日には自から來りてク氏に伴な

ひ、或は公園地に又は倶楽部に、兩々相携へて睦しく、暮ゆく日影をうしとかこてり。（ばづかしくおとなしく互ひに今はなりにけり、其時女は較べこしふりわけ髪の肩こしぬ、君ならずして誰かなづべきと、かいて送りたりければ云々……とは謠曲井筒のクセの一節なり、ふと此事を思ひ起し、玆に附記して諸子に問ふ、諸子それ以て如何となす、これをしも幼馴染といふべきやいかに、）

ク氏此時は已に四十に近く、クララはいまだ僅に破瓜、年齢の相違あまりに多く、かつ又クララは幼年の昔の如く、今になほおぢさん〳〵とク氏を呼びなしたりければ、叔姪と思ひ、或は又父子とさへ思ふ人のいとも多く、初の程こそはこを疑ふものとては交際場裡唯の一人だもなかりしが、遂には誰いふとなくいまわしき風潮をなす者、こゝかしこより顯はれたり（此時ク氏は已に大統領となりたり）

此年の暮に、クラヽは二三の人を伴なひて、歐洲に行けり、如何なる目的なりしやは、吾人の知らさる處なり、されども其敵黨の人のいふか如く、正式の婚をなさん其日まで、其風聞を避けんがため、彼處に送りしものなりとは、是甚だしき中傷説にして取るに足らず、唯吾人の耳にせしは、佛都パリスに於て、クララは尤も巧なる仕立屋に命じ、いとも〳〵美しき晴着を多く作らしめつゝありとの事なり、然して是等の晴着こそは、やがて彼女の白舍に入らん時の料なるべしとは、吾も人も想像せり、さればそれ等買物のために行きしといふこそ當らずと雖ども遠からざるべし、いかでかク氏に於てさる事のあるべき敵人の中傷笑ふべくも亦憐れむべし。

事躰斯の如し、最早いかに秘するとも、兩者の尤も相愛し、其終生を共にすべしといふ事は、萬々默々の裡に合點なせし處なり、されどもクララはいまだ一言半

句だも、是について語らざりしかば、隨行の人々も知りて知らざるを粧ひたることそ可咲けれ。

翌年の五月に至り、所用悉く整ひて、クララは歸國の途に登れり、海上無事にして其米國に達しける日、大統領の秘書官ラモントといへる人は、美しき小蒸氣船を仕立て丶是を出迎ひたり、是ラモントの私意に出でしにあらず、必ずや大統領の屬によりしものなるべし、此事によりても風潮はいよ〳〵高くなりゆき、各種の新紙はおのがじゝ様々の説を書き立てたり（中には一少女クララを堂々たる一國の官吏が出迎ふとは是違法の行なりと攻擊せし新聞もありしとかや）

何故にかくも此事を深く秘せしやとは、讀者の一般にふかく疑ふ所なるべし、余も亦深く是をあやしむ、もし此事をして東洋の國ならしめば、固より一般の風習としてさあるべしといへども、米國の人としてはいともふさわしからぬ事ともなり、記傳者其わけを語らず、

語らずといへども余は思ふ堂々一國の主權を握る大統領にして、微々たる一市人の娘を娶ること、すでに平衡を失ひ物議を惹くの種なりけり、然のみならず、其年齡の懸隔せるをはじめ從來の關係よりして考へ見るも、いさゝか憚かる所なきにあらず、況んや婦人の中には或嫉妬を以て中傷せんとせるものさへもありければ、かくこそ秘せしものなるべし、且大統領の性質として、いとも〳〵華手なる事を忌みしかば成べく人に知らせじと、固く包みしものなるべし。

クララ歸國の後は結婚の準備、着々として秘密の裡に進み行きぬ、殊に又其結婚を忌む色ありし親戚の長者、某といへる老人さへ今や病に倒れしかば、露一點の滯りもなくいよ〳〵結婚の式は擧行されけり。

米國大統領の結婚としいへば、如何に盛んにして又如何に大なるかと、聞く人々の想像せん、然れども是は決してさることもなく、いとも〳〵質素を極め、唯々兩

かに歩きも、其多數は是米國政治の粹なり、されば百萬の風俗來りていとも賑々敷、其盛大を助くるに優れる事や百千俗、誠にかゝる婚儀に逢ふこそ女子最上の大名譽、如何にクララのうれしかりけん、いかに母の喜びたりけん、唯うらむ父なる人の是を見るに至らざりしを》

婚儀はすべて新敎の式によりて是を行ひたりければ舊敎僧侶の間には種々の苦情を鳴らし種々言を設けて非難ものさへありしと。

交際社會の人々も種々樣々と其不當《大統領と市人の娘、然も父さへなき者と》を以て是をそしり、果ては人身攻擊をさへなすに到れり、されども是皆前にもいひし如く、政黨上相敵視せる一部の人々のなせる一種の俗論にして取るに足らず、決して〳〵一般の輿論なぞといふにあらねば諸子それ思ひ誤まるなかれ。

さればこそデモクラットに屬する人々は《デモクラットとはクリーブランド氏の屬せる黨派の名なり、敵黨はリパブリカンと云ふ、猶我國に於ける進歩黨自由黨といふが如し、クリーブランド氏の出づるまで殆んど二十餘年の間、リパブリカンに勢力を占められ、上は政治の大綱より下は坊間の些々たる事に至るまで、に其左右する處となりしと、剛勇勁直主義確固孜々として倦まず、荒まず、毎日事務に服すること十六時間誠に米國政治家の典型ともいふべきクリーブランド氏の出づるありて、久々に勝を政壇の上に占めたること、然かも前後二回、大いに日頃の鬱を散じ、黨人の氣を強めたり、人はいふ有名なるリンコルン以後の好大統領なりと、誠に〳〵然あるべし、序ながら是を附記す》大いに結婚を喜び、如何にもして其擧を盛になし、一は以て其黨派的尊敬を表し、一は以て其威を敵黨の人に示さんと百方これがために苦慮し、其式日の夕の如

きは、我一と白舍の門に相集まり、やがて式を終へて兩々相携へ、嬉々として出來るべき新夫婦《妻君には新の字固より可なりといへども、大統領に對しては、新の字或はいかにあるべき、此處一番の考へものなり、諸子それ以て如何となす、………呵々》を歡迎せんと待構へたりしも、成べく質素を旨とせる大統領は八方の入口より同じ仕立の馬車をかり出し、そのいつれが果して眞なる、更に人をして知るに由なからしむと《或はいふ是敵黨の狙擊などをさけんがために然りしなりと、然れども余は疑ふ、殺伐野蠻なる露國の如きにありては或はさることとあるやも知らず、されども平穩の美德を以て世界に驕る、北米合衆國の天地、いかでさることの恐あるべき、さればかゝる言こそ誠に野人の非語といふべし》

日ならずして大統領新夫人の肖像は、各所の店頭に出されたり、されどいづれも其眞を寫し得たるものはあらず、誠に新夫人こそは美其物の權化にして全身に一の欠なく、筆も及ばず鑿も足らず、是に向へは百萬の美術家更に顏色なし、決して／＼寫すべからず、却て是より習ふべしとは、當代名譽の米國畵師アンミーフアン公といへる人の衆に語りし處なり、されば記傳家も一々を擧げて其美を語らず唯々She has finest figureの一句を以て是を蓋へり《是は／＼とはかり花のよしの山…………貞室》

古來美女に不良の人多しとは我國人の常々に語る處なり、單に我國のみならず、世界中到る處に其例多し、何か故にそれ然る、むかし希臘の哲人が吾人が言を殘せし如く、彼等は人を糜するに足るの美を以て刀劍に代へ用ひ、或は無上の資產と心得、知らず／＼不良の道に陷るなり、されば此の如く美貌に富めるクリーブランド夫人をしてもし一樣の女ならしめばそれいかん、然るに其兩親よりうけ得たる溫良の美德は美貌の

美よりも更に美にして、今も尚フランクといひし昔に變らず、其物に耻ぢらひ萬づうちは勝なること、聽くものをして敬慕の念を起さしむ、今其逸事をあげていはんに、或時の事とかや、多くの貴夫人達一堂に會することのありしとき、絶へず人の蔭に〳〵とまはりしかば、其内の年長者、こそ其袖をひいて、御身こそ大統領の夫人ならずや、大統領の夫人としいへば一國の婦女すべて是を仰ぐ處、さるをなどてや人後に立ちたまふ、いざ〳〵第一の席に出てたまはれといひしかば、美しき顔をサト赤らめ、いとも〳〵聲ひきくMust I?といひしとぞ（いふなかれ大統領夫人たるの威を欠くと、是尋常一般チテンバ的の考のみ、天下いづれもの娘たち、御身等は皆かくあれかし、余は此傳記中此一言を以て余又語るに足らずと信ず、此Must I?といふ事を小さき紙の端にかき、天下のチテンバ達にのまさまく欲す）

斯くまでも謙遜柔和なる性質のクリーブランド夫人は、事を以て人に驕らず、言を以て世に鳴らさず、されば赫々たる内助の功多くも見へず、されど余は思ふその見へざる處こそ却て内助の功なりと、唯々其一斑、願くは青簾のうち、岐阜提灯の下、大家の物したまひたる夏季大附錄を讀みたまふ序を以て、一讀の榮を賜はらば余は滿足を感ずるなり

（完）

學問の利害

學問する程よき事はなく、又、學問する程恐ろしき事はあらじ、生れつき正しき人の、ものまなびしたるは、力ある者の柔術、捕手など習へるに均しく、いよ〳〵學びて、いよ〳〵貴けれど、生れつきいかゞと思ふ人の、物しりたるは、たはれたる人、又は、酒に醉ひたるものゝ、力强くして、しかも、柔術、捕手など知りたるに均し、いよ〳〵學びて、彌惡し、もろこしの士大夫さいへる者、いづれが科擧より進み、學問せざる者はある、されど、民を害ひ、國をあやまりたるなどいひて、今の世までも、惡み謗れる人、少きにあらず、學問したらさせて、必、よろしかるべしといはんや、莊子の、儒者は、詩書をもて、つかをあばくさいへる、誹謗にはあらじ（雨森芳洲）

談叢

寺子屋

園部紫嬌

寺子屋は今の小學校である、
此寺子屋には三ッの區別があつて
『山ノ手』麹町、麻布、赤坂、四谷、牛込、小石川、本郷、
　本所、深川、下谷、淺草、
『下町』神田、日本橋、京橋、芝、
『町外レ』郡部に接近したる土地、
猶此他にも、活計に苦しむ貧民の子弟を教育した師と、諸藩の邸内にあつて、藩中の兒童を教授した者との、二ッがあつた、
所で其、寺子屋があつた場所はと云ふと、所謂町外レと稱するものは、神主僧侶十一月浪人なぞの變化した者が即ちお師匠樣であるから、教場も自然お寺樣か浪宅であつた、市内の者は、呉服屋薪屋と軒を並べたのもあれば、新道裏通り路次なぞと一向に一定なかつたが、例の各藩邸内にあるものは、其處がそれ、お武家樣故、夫だけ自づと華麗であつた、
概して教場はお師匠樣のお宅と云ふのだから、一定の標準はなかつたなれど、一切疊敷で生徒は必ず對座て机を幾行にも並べていろはにほへと、讀たのだ、が町外れは文庫を各自携さへて行たもので、机の傍に置たものださうだ、
だが此机お文庫は毎日お退校の時片付て又翌朝排列るので、机の順は登校の遲速に依て變るのだから自然進學奬勵の一法となるのだ、
夫で教育の方進は、習字に尤も重きを置たもので、望の者丈に授けた素讀は、男子に實語教、童子教、古状揃、三字經、四書、五經、一歩進んで文選、女子には

百人一首、女今川、女大學、女庭訓往來、等の種類で、素讀は何處迄も讀で字の如く、講釋は夢にも聞た事のないお弟子樣だから、火ノ玉を喰ふ(子ノ曰く)と覺た連中が多い理だ、

修身科は、一六三八に師匠が、忠臣、義僕、孝子、節婦、のお咄をなされたゞけで、夫も例の二十四孝なぞが、講釋の半を扶けたものである、

算術は八算見一相場割、敎科書は塵功ノ記に限つたもので、憐れや是も望まれゝば敎へるの方進だつたのだ、

其處で、習字には和樣唐樣の二種があつて、和樣には御家流、持明院流、定家流、近衞流、嵯峨流、大師流、勅筆流、三條流、飛鳥井流、正藏主樣流、光悅流、瀧本流、傳內流、大橋流、溝口流、花形流、百瀨流、長尾流、

なぞと稱れた流義があつたが、未だ他にもあつたさうで、此中尤も中古に到つて用ひられたのは御家流である、而かして光悅流以下八流は和樣中の支流で其勢力や極めて微々たる物であつた、

尤も重きを習字に置た筈で、名こそ習字であるが、素讀の素讀とは大きに異り、習字の中には讀方、作文、地理、修身、すべての科目が含まれて居たので、夫は其お手本に、如何なる種類が採用されて居たかを探れば直と知り得らるゝのである、其種類は、

『男子』いろは、數字、名頭、苗字盡、請取文、送り狀、江戶方角、書狀、商賣往來、消息往來、證文店請狀、庭訓往來、千字文、

『女子』以呂波、文の文(假名交り)名頭、國盡、女江戶方角、女消息往來、商賣往來、庭訓往來、

なぞであつたのだ、淸書は每月六回、即ち六日目每で、所謂當時の點數は百點六十點八十點が滿點だが、寺子屋時代は單に、上中下の三等に區別されて居たので、

等級に替る評語を與へたのだ、其評語に曰く『大極上々吉』『大上大吉』『上々吉』と、

夫から試驗だ、此試驗も誠に簡畧極まるもので、文部省のお役人が出席するなぞと云ふ事は無論なく、唯僅に月末演習と號して、儀式的に暗誦した手本を讀むのと、大演習と號して、年末是も暗誦した數十本の手本を、生徒五六名宛、師の面前にかしこまつて、誦する計りに止まるので、右終ると優等者の姓名を、平素矯正の一助にもと『油斷大敵』『精神一到何事不レ成』『手習は坂に車を押す如く油斷をすると跡へ戻るぞ』なんぞと大書した額を並べて、教場に掲示し、而して後ち、筆墨菓子を夫々賞品として與へる、……是が其頃の、小試驗と大試驗なのである、

此外お席書と稱する、一種の試驗があつたが、是は四月八月の兩度に催ふされたもので、當日は奉書、唐紙、西ノ内、畵箋紙、に生徒が腕を揮つた奴を、教場の四面に貼付て、其父兄の縱覽に供し、且つ批評を請ふので、仲々生徒に取ては晴れの場所だつたに相違ない、……と云ふの、揮毫席には毛氈を敷き、師匠が男子なれば麻上下に紋服、女子なれば白襟紋付と云ふ拵へで、生徒も又分に應じ美服を着けて出席すると、師は是を一人宛呼び出し、二三字若くは七八字の大字を書かしめ、以前の如く張り出すのだから、小國民の小儀式中の大禮とも云ふべき會であるからだ、

又正月五日に『書初』と云ふ催しがあつたが、お席書と大同小異があつて唯異るのはお席書には生徒一般へ赤飯を出し、書初にはおしる粉を出して、必ず福引の催ふしがあつたゞけだ、

其處で先づ寺子屋の大躰は解つたらうが、是から生徒其者に就ての咄をせねば編者の義務が濟まぬ……讀者は面白もないと云はるゝか知らねど、是から案外面白くなるかも知れぬ、マアおとなにして聽て御覽、

寺子屋と名の付た限りは、何處にも必ず左の如き掟書があつたものだ

一師匠と父母の申付を守るべき事

一禮儀を重んじ行儀を正しくする事

一朋輩互に睦くすべき事

一喧嘩口論をなすべからざる事

一食物金錢など持參すべからざる事

一途中にて高聲なすべからざる事

右は男子への掟書で、女子へのは自然相違して居る、



一顔のよしあし　一きもの〻よしあし

一家のくらしむき　一中くち

一いつけぐち　一耳こすり

一たか笑ひ　一男の子のうはさ

一たんき　一わがま〻のふるまひ

一むだくち

右決してなすべからずそむくものは七ッ時迄とめ置き候事

とある、此七ッ時迄とめ置と云ふのは、皆生徒が退校跡へ、一人一時或は半時殘し置くので、叱責中生徒が往々加えられる、罰則だ、猶此他に、芝居の寺子屋で、よだれくりがやられる如く、机の上に乘せられ、水を盛し茶碗と、火のつきし線香とを、持せられて立せられる罰則もあつた、

よだれくりで思ひ出したが、彼劇の寺子屋で、松王の悴小太郎が弟子入をする時、菓子を持て來るが、あれ

は實際で、弟子入の當日は他の生徒へ親睦を通ずるため、下等は煎餅、上等は最中を、仲丸かれと贈ッたものだ、

所で餘り長篇と、少年小女に飽るゝ怖れがあるから、好い加減に筆を止めて、更に退校の模様を語らう、ダが正直に綴るも面白からねば、玆に一番小説躰で記すとしやう、

商賣往來凡そ商賣持ち扱ふ文字いんじゆ取り遣りの日記、……カウ皆しよにんだぜ、己は掃持番だから少と待ッしと云ふのに、ヤァイしよにんやァイ、あれ／＼彼様悪戯ァすらあ、明日お師匠様に告口て留させてやるぞ、カウ長松さん明日忘れずに晦錢を持て來なョ、帳面が消えねエから悪いと云ちやァねへ、オヤ／＼おめへお手本へ滅層墨をかけたの、お手本を黒くするとお師匠様の顔へ墨を塗たと同じ事だと、オヤ／＼こりやァべたつこの墨だの、何だ、あの三公が塗た、明日告口てやんな、おめへお師匠様にめつかると屹度とめられるぜ、此間も三公は女座のやり子さんを路で打擲つて彼家のおばさんに何様に叱られたらう、福引の時張紙の松蕈を採て口惜しがつた時ァ可笑しかつた、ウ、左様よ、大文字の時龜井戸の天神様で雪隠へ行きてへとッて、べそをかいた時も可笑しかつた、ウ、左様よ、鯰の蒲焼で飯を十杯許り喰たぜ、行儀の悪いと云ちやァねへ、天神様の方を向て小便を仕たから手が上達らねへと、彼處に居た人が左様云たぜ、手を書かねへと、人にあきめくらだと云れるぜ、夫だから己なんざァ、好く習ふよ、三公なんざァ未だ商賣往來は習やアしねへぜ、ウ、左様よ、男座一番のいたづらだと、お師匠様が左様云つたぜ、ウ、左様よ、アレ／＼粉屋の白犬が嚙合やァがる、ヤァ、オゥシキ／＼、皆けしかけろ、オウシキ／＼

是が男座のよだれくりが歸路の様子だ、偖て女座の稽古前、又は、稽古休みの間は左の如くである

おかねさんお遊びな、アノおたきさんはね、先刻お手玉を採らうとお云ひだから、私が一さくらこぼし迄いつたを、お四でお返却しさ、先度もね、アノお邸に奉公をして居なはる姉さんの所から、好い人形の衣を貰つて、大切に仕て置たらチ、アノおたきさんがちやんと隱匿して持てお居でさ、夫からおつかさんに告口てやつたらチ、アノおつかさんの云ふにやア、又姉さんの所から貰つてやるから、おたきさんにあげてお仕舞とお云ひだから、私は默つて居るよ、そしておたきさんのおつかさんは花魁だとサ、夫だから眞誠のおつかさんじやアねへと、眞誠のおつかさんは遠くの田舍にあると、だから丁子水も變り繪も水入に挿す花も買て呉れねへとサ、オヤ／＼お前好い簪をお挿しだねへ、一寸お見せ、オヤ／＼好いねへ、是りやア何處でお買だ、私もおつかさんに强請て、買て貰ふや、私が姉さんはね、御奉公に出る時誠に／＼好い簪をお父様に買てお貰ひだヨ、私も大きくなると、姉さんのお邸へ御奉公にあがれば、アノお三味線を好く彈ねへければお小性にはなれねへと、夫だからおつかさんに毎日教はるわ、岡崎に一ツとやア、宵は待ち、黒髪をあげて今春駒を習ふわ、おかねさんお前おたきさんとお遊びでないよ、意地の惡い事計りお云ひだからお止しよ、其代りにお前にね、姉さんの所から貰つた人形の衣をあげるから何時迄もお遊びよ、お前はおとなしひから皆がお賞めだよ、

是から花見即ち當時の所謂、運動會の事を咄さう、毎年彌生の花の咲く頃、上野に、向島に、飛島山に、花

見の會は催ふされたりき、此諸般の準備は、二月下旬から用意されて、當日は男女共に、揃ひの手拭を襟首に巻き、各自麻裏草履を穿き、女子に限りて一様の日傘に一層の景氣を添へさせ、時を期して師家に集まり、大概は朝四ツ時より行列を組で志ざす方へ出掛けたものだ、此行列はやゝ當今の運動會に近く、『何々堂』なぞと筆太に記した旗を押し立て、一軍を男子、二軍を女子、師は小紋の服引尻切搦[illegible]一番て殿しで、是が後殿たり、偖て其次は



兩掛に荷、雇の小者是を預り、甚しき尤も甚しきに到つては、細君共々町内の何文字など云ふ常磐津の師匠に三味線かつがせ、是を後陣にあつるものもあつた、

彌生の空を縫ひ行きつゝ、目的土地に着すれば、鬼ごつこ、子をとろ、めかくし、下駄隠し、は勿論、釜鬼、かくれんぼ、馬ごつこ、お手玉探てお一櫻と仲好くすれば、開アいた〳〵と仲丸く遊ぶ智慧なしもあつた、」

兎角する間黄昏近くなれば、以前の如く行列揃へて家路に向ふた、其處で此花見の催ふされた後ち二日は、跡片付けとて授業を休んだ、ダカラ生徒は、御賽日が三度一緒に來た程、お花見を喜んだものだと聽て居る、」

猶此外にも、七月色紙へ字を書て、竹の葉に結び付け、表へ建て其下で遊ぶとか、二月初午に色紙を織ひで幟を拵へ、

奉納 何々稻荷大明神 何々堂門人 何某

と記して、奉納するとか、随分妙な事で、生徒が樂みにして催ふしがあつた、

サア今度は入門の手續及び此の費用を述て此咄を終らふ、

學齡は大概五歳だつたが八九歳に成て入學する者が多かッた、退學は男子十二三、女子十四五であつたから、就學年限五ヶ年程だつたのだ、

入學の節入用の品は

机、硯、　　二百五十文より二百七十文、

筆一本、　　四文、　半紙一帖、　八文、

墨一挺、　　十二文、

煎餅百人分、四百文、　最中、　一朱、

先是が通常一般のもので、咄せば咄す程長くなるし、是が餘り銷夏の具になるでもないから、一旦筆を止る事に仕やう、　（完）

家政

感せし事二つ三つ

松ヶ枝

◎鷄卵の騰貴　昨今魚類不漁の爲め鷄卵大に騰貴し例年の三割方高直にて相場は一貫目一圓八九十錢位なるが至ッて品拂底なり

一家の主人が自分の家庭をたのしむやうになりますとあの忌々しい花街の高樓は漸次淋しくなつて滅するやうになり社界の風紀が大に清淨になつてまいりましやう、然かしその家の主人にその家庭の快樂を感ぜしむる責任は主もに誰の肩にあるのでしやう云ふまでもない母と妻との責任です、今こゝには寧ろ妻が夫に對してあらまほしき一つ二つを述べましやう、

申たい事は多いけれど今日はこの頃の暑さに際し感じたとのみ僅に述べて置たいので餘は又後日に讓りまし

やう

一、清潔……清潔は年百年中必用ですが殊に夏には一層注意を要します、部屋の内は云ふまでもない庭先などよく奇麗に掃除して朝夕水を打つて置きますと小さな庭先でも涼しそうに見えまする、

家の周圍計りではない自分の身の廻りの清潔が第一肝要で御座います、熱いからといふて帶ひも解き放して髪なとも散らして置きましたならそれこそ一層熱苦るしう感ぜられて堪りません、清淨に身仕度して端然として居る事が一番涼しからうと思ひますよし涼しくなくとも心地がようムいます

良人が勤めから歸つて來ても若しその妻が奧の間にしだらない風をして晝寝など致して居りましたなら無厭やに感じるでムいましやう、私の知人に勝れた美男子がムいました或時一人の友人が來て話の序、その人に向て「貴殿の擇む半身はさぞ美くしい女だらう」と申ましたにその人は答ひまして「いや、私は決して容顏の美くしいといふのを擇みません只だ身じまいのよい清潔な女が欲しい」と申されました色に浮かれの男はいざ知らず志あり心ある殿方は必ずや右の人と同じきお答をなさるでムいましやう、清潔は誠に女の飾りでムいます、

車上でも徒歩でも熱い今時良人が汗になつて外から歸つて來ましたなら直ぐに冷水を盥に汲んで身を清めさせさつぱりした着物を着換ひさせ申て自分の清楚な風姿を以て喜ばしく迎ひましたなら良人たる人は熱さも忘れて嬉しく思ふではありますまいか毎日々々の事なか／＼骨も折れましやうがそこが女のたしなみです、

一、食物……夏日の食物は特別注意を要します魚肉の類は新鮮なものでなければ身躰に障りますから氣を付けやうとすれば隨て魚肉は餘り得られません勿論此は都市內の事、田舍の海岸近き處に行きましたら新しい魚は多くありましやうが何れに致せ魚類を料理致しまする時はそのしなのさがらぬやう注意が肝心です、又少し並の魚類を一日か二日か貯へて置かふと致しまするには腹をさいて腹の內の汚いものを取り去りその代りに炭の碎粉をつめ込んで又腹を合せ暗い處の土の上に直に置て何か桶でも蓋して置きますと一日二日は新らしくて持てます然し格別に熱い時はこの限りじやありません、

夏には胡瓜もみなど中て兎角酸を用ゆるとが多いけれど面倒でもその都度一寸酸を煮立てゝお用ひなさいませ、酸には虫の湧く事が多いからです、

同じ野菜を料理するにもこしらい方によりましては隨分樣々に出來ますから少し注意すれば同じ野菜で良人によい顏をさする事が出來ます、縱令ば同じ茄子をこしらひましても料理の方が樣々で各その味が異ります、一二を擧げますれば

茄子を蒸してそれに砂糖と山椒とを合せたる味噌を付けますもの、

餘り大きくない茄子を二つに割つて內を空にしその中に柔かく煮た牛肉をつめ込み又その割つた茄子をかんぴよふ杯にて結び合せ味よき汁にて煮るもの、又は程よき茄子を火の上に載せて燒き醬油をつけて食ふもの、その他味噌汁、すまし、甘煮等人の知る處もさま〴〵です、

何にても凡て同じ品ものを用ゆるとも每日同一

の料理方ならざるやう注意すればさまで厭きぬものでムいます、

老人の取扱ひ

人は年老ゆるに從ひ恰も小兒の如く身躰も薄弱となり精神智識も消耗するものなり此時に至りては日々成長する小兒と全く反對にして日々枯凋しゆくことなれば實に憫れむべきものなり而して老人も亦小兒の如くものに感じ易く些少なる喜びにも非常に喜び僅かなる憂ひにも大いに心を痛ましむるものなれば主婦たるものは老者に對しては能く〱注意を加へ親切に取り扱ひ賴み少なき心身を慰めずんばあるべからず

第一に大抵老人は騷かしき事を厭ふ者なれば常に閑靜になし之に對する言語擧動も成るべく温和鄭寧ならざるべからず殊に心配ともなるべき事は志らしめざると肝要なり

又年老ゆれば家事にも關せず又世事にも頓着せざるか故常に無聊を感ずるものなれば老幼打ち交りて解し易すき書物を讀み昔物語をなし又は世の中の出來事を語るなどつとめて快樂を與ふるやうすべし特に昔語の如きは老人の何より喜ぶものなり

斯く一方には勉めて其心を慰むると共に一方にも身躰の健康を保たしむる爲に手輕き運動を勸むべし運動は凡て生ある者には悉く必要なれども別て日々座り勝ちなる老人には最も必要なり花壇盆栽などの手入れも可なるべく時には人力車に乘せ物語りなどしつゝ郊外を廻る如き心身を慰むること一方ならざるべし

生物に噛まれし時

暑さを避けて木陰に憩ひ又は萩桔梗の秋の花を尋ね朝

露を分くる時など誤て虫に螫され又は蛇に嚙まるゝなど田舎にはありがちの事蛇に嚙まるゝ如き刺すが如くまびるゝ如き痛みを覺へ青黒く赤みを帶びて腫れはては目まひなど起すに至る、狂犬、牛、馬、等も亦甚だ危險なるものなり斯く生物に嚙まれし時はまづ其毒の血に混ぜざるやうにし次に其毒を消さゞるべからず即ち一方には其傷より上の方をきびしく押へ又之を縛りて其毒の深入りするを防ぐと共に一方には口にて吸ひ（此場合には直に唾を吐き又口をすゝぐべし）又之を切り開きて血と共に毒の流れ出でしめ若しくは醋鹽水等にて洗ふべく或は硫酸などにて傷所を燒くべし若し手療治にて如何と思はゞ成るべく早く醫師に示すをよしとす些細なる疵より命にもかゝはる事あれば注意すべき事なり

八月中の盆栽

◎松　常盤なる緑の色、何時見ても掬すべきの趣きあれど、殊に此月に於て其の蒼々たるは、一段の凉味を感じ觀賞比類なし、此月の下旬より古葉を取り去るべし

◎棕櫚竹と蘇鐵　共に夏季の觀賞に適し、南方の風を見るの思ひあり

◎百日紅　觀賞して佳なり

◎南天燭　此月結實す觀賞最佳

◎葡萄、林檎、梨　共に觀賞に宜しく、綠葉の間熟したる實の連接して、甘露滴るゝかと許、凉味面白し

◎百合、鹿の子百合　此の月に開花す

◎雁來紅　觀賞するの價値あり

◎石菖蒲　觀賞可なり

◎蘭草　此月下旬に開花す

◎牽牛花　今を盛りと毎曉時を期して咲き揃ふ、寢醒の觀賞大によし

◎秋の七草　觀賞めでたし

◎翠菊　本年の春蒔なり愛觀に適す

◎小菊の類　此頃花咲くものにして、小女の優美しき姿に髣髴たる、其雅致愛觀すべし

◎秋海棠　今月中旬より開花す

社交一斑

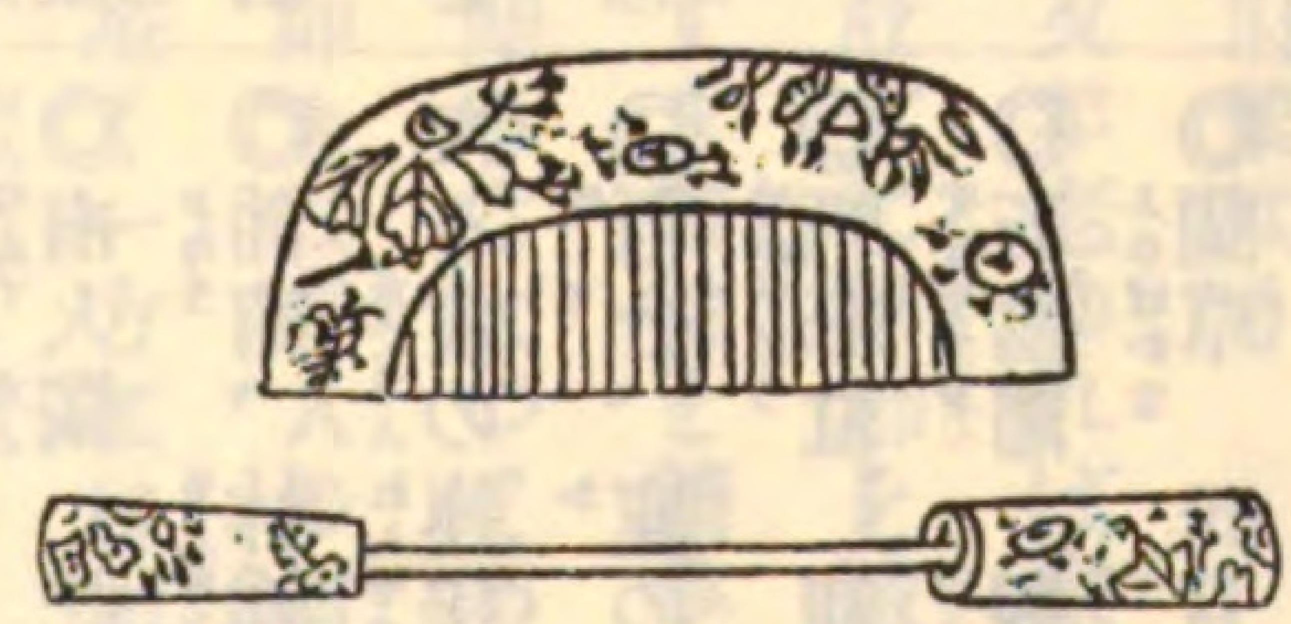
流行の栞

流行の髮具　　流行子

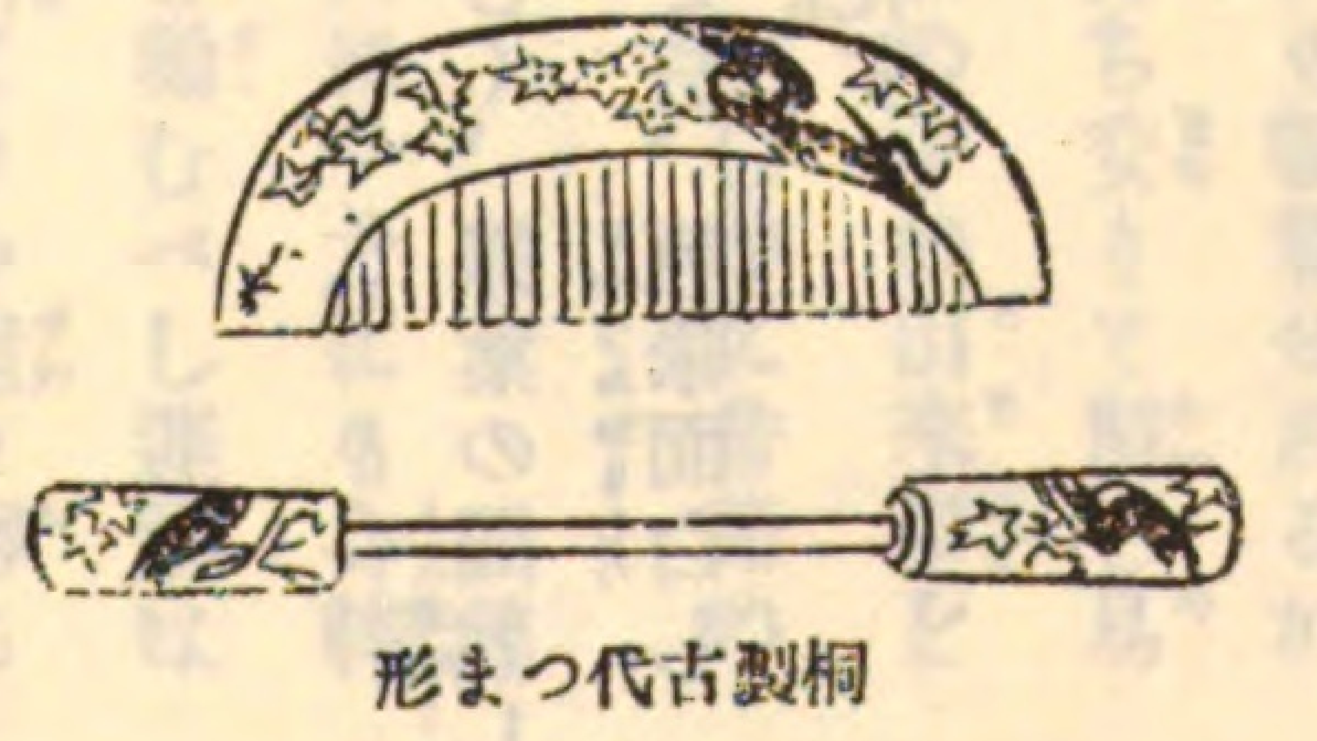
夏向の髮具に杉製と桐製が流行の大部分を占め居る事はこれまで報導し參らせたるが、こゝに繪様を添えて御覽に入るべし。

流行形は政子形、其他の形は振はず

杉製政子形の流行模様、古代菊桐、光琳の紅葉、龍田川、流水に蛇籠等兎に角涼し氣なるものを可とす（價三圓内外なりとし）


杉製政子形

桐製の古代つま形の蒔繪とぎ出など面白し。


桐製古代つま形

象牙製は蒔繪よりも彫刻、芝山入氣多し（青貝、丁貝等のほり込）

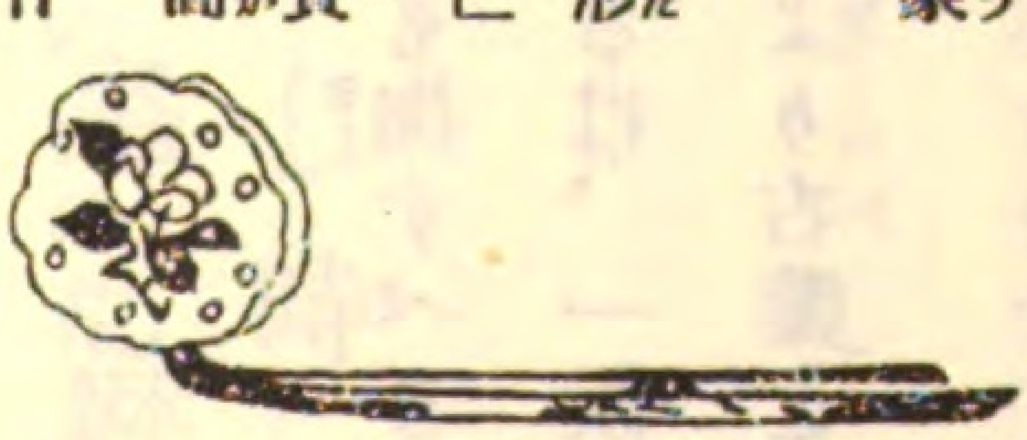

象牙製


ちよいさ挿


桃實向ざし

ちよいさ挿には象牙、銘刀木の彫、又は蒔繪、流行形は福びん、つま形」向挿には桃の實に七福神さゝ、高砂、山吹里、日※

※清戰爭等を細に彫刻したるもの流行す（五石刀）脚は鋼鐵を可とす。象牙の向挿には形を


象牙向ざし

（京橋區尾張町松田白牡丹本舗にて現品を販賣す）

差し是等な當時髷新髷高髷の流行といふなるべし。

天然の花と人の花

觀　風　生

露のひぬ間の朝顔の夢の如く曉の空に咲き出づるを賞せんと早朝冷水三盤をかぶつて思ふ朋友と共に予が宅より入谷丸新の朝顔園に至りぬ。

見渡せば花はいろ〳〵に咲き分けて美しけれど、さて花を見る人の衣裳の美しきに比べては花も亦顔色なかんとす。

七八歳の可憐なる娘子が、婆に手を率かれて歩くさまを見るに、鳩羽鼠と裏葉柳のぼかし色に遠山かすみの絹の模様にとき色練の長襦袢を合せ、萌え出づる緋縮緬の袖より雪のやうな手を出して婆や私にはむかふの紅絞りが好いよといへば、其傍にちよいと八重子さん、あなたはどれに遊ばすの、私は小豆色と鬱金と淺黄に致しますよ、と言ひながら一人の同伴を顧る眼元の涼しきこれはいづれさるやんごとなき令孃とも いふなるべし、一人は淡お納戸地のまがき崩の紋織上布にひわ色の丸龍の小柳と小豆色絽の鎌倉八景の模様を合せし帶を胸高にメめ、

朝顔の花見るより却つて人造の花を見んとて、十目此二人にあつまりぬ、

二人の紳士ありけり、一人は黒絽の一寸大の五ツ紋の羽織に越後の白地上布の十の字かすり、お納戸地一本筋の絽の帶をメめ四邊まばゆき金側時計を挿みし樣子、帶も之が爲に一層の光彩を増したり、他の一人は紗の三紋に代價四十圓位とも見ゆべきさぼけ大名の本塲上布を着、十二三圓位の紺獻上の帶をメめ、前者の意氣に對し澁味ある、行方こそ違へ共に五分のスキあらず、予が目に觸れて特に目新しく覺えたるは以上五人の扮裝とす、予も花の美よりも人爲の美なるに驚きぬ。

こゝより出てゝ敷丁、笹の雪にて一酌を催ふし、入り來る人の風俗を見るに、白地紺形の同じやうなる浴衣にお納戸、小豆、銀鼠、鳩羽等の小柳繻子にぼかし模樣の絽の腹合をぞろりと引つかけし樣子と前後左右を顧みず傍若無人に喋々喃々して大に酒を行ふ所を見れば、蓋し世に藝妓と稱するものなるべし、其傍に此連中にからかひながら飲み居る商人らしき二三人の男あり、いづれも其風俗に優劣なし、一は越後の錦縞の帷子に藍鐵の透屋を羽織り、一は白微塵の銘線に壁透屋大名の羽織、一は結城紬のさつま筋に明石の萬筋をはをりたり、此三人は商

人的流行品の粋を極めたるものなるべし。

雜録

女學界の風潮

現時の女學界は、概言すれば質素なる時代とも申すべき歟。勿論盛なりとは謂ふべからず、振ひつゝありとは謂ふべからざれども、去り迚一部分に手堅き所なからざる也。

一時は男女同權の說盛に唱道せられ、交際場裡は婦人を中心とせんと欲したるを以て、女子の高等教育思の外に興り、男女の同權を熱望し、女子の獨立を熱望するもの多く、一方に無妻主義を口にするものありたると共に、一方には終生夫を持たじなど唱ふるものもあるに至りたりき。其弊は女子の高等教育は徒らに婦人を生意氣にしお轉婆にするかの如く世に歌はれたりと雖、從て此日に於ける女子教育は自ら精神あり氣魄あり信仰ありたり、特に其宗教的高等女學の如き、明に其特色を認むべかりし也。

然るに今や女子教育の目的とする所只管良妻賢母を得んとするに在りて、復た一時の如く必ずしも男女の同權を主張せず、必ずしも女子の獨立を主張せず、志樂しき家庭を作るに在りて、必ずしも終身獨居するを高しとせざる也。是れ實に著しき變化にあらずや。

而して此の變化は、之を着實になりたりと謂へば則ち着實になりたるなれども、所謂精神所謂氣魄所謂信仰は之が爲に却て多くを消耗するに至りたり。特に宗教的高等女學の如き、幾んど全く其特色を見ざらんとす。

是れ宗教に熱したる信仰なく、社會に活ける精神氣魄なき時代の、免れ難き影響なりと雖、女子教育の大精神にして未だ十分に發揮せられざるに由るもの、亦決

して少なからざる也。
女子教育の大なる妨害の一は、其教育の直ちに有形的に應用する場合多からざるより生ずる誤解也。女子にして交際場裡の中心たらんとする如き場合に在ては、其教育は直ちに應用せられ、從て教育有形的に應用せられて、直ちに其効果を見るべしと雖、一般に家庭を作る爲には其教育の有形的に應用して効果を見るべきもの多からず。却て人より生意氣と歌はるゝの資となるものあり。是に於て乎、世は多く女子の高等教育を不要視するの誤に陷らんとす。特に家庭の改善は社會改善の始にして、女子教育は主として家庭改善の爲なることを知らざる也。
加之今の教育界は普通教育の教師に其人少なきのみならず、男子の高等教育に其人少なきのみならず、女子の高等教育に至ては其人少なきこと最も甚し。彼等は女子教育の大精神を把持せざるに止らず、自家の信仰自家の節操自家の見識亦頗る確ならざるものあり。」
戰後の教育の如き、特に注意を要すべきものにして、國民の獨立國民たるべき資格を作ると同時に、併せて世界的國民たるべき資格を作るの希望ならざるべからざるに、戰後に於る國民位地の異動に對する影響とては女學界の如き幾んど之を見出すに由なき也。若し强て之を求めば其一部分に於ける外國語學習者の多少貭面目になりたるに在るべき歟。
戰後國民位地の異動に對し、女子教育の一層切要なるものあること次第に識者に唱説せらるゝに至りたれば、女子教育の前途は望み多きこと勿論なりと雖、現時の如く女子の教育に精神なく氣魄なく信仰なき間は、未だ遽に其隆盛を見るべからざるが如し。

博雅三位（口繪のゑとき）

博雅三位某法師に就きて琵琶を學ばんと乞ふ、許さず、

博雅三年の長日月、法師の庵に徘徊す、月明なる一夜、法師興に入るの餘、琵琶を把つて秘曲を彈す、人あり外に在つて佇立す、これ博雅なり、法師終に其熱心を感じ悉く秘曲を傳へたり。

歌苑

磯邊千波撰

、、、避暑　岩代　渡部幸吉
ことしけきうき世を捨てゝ今は只水音清き庵そ長閑き

、、、同　越後　坂口信正
生ひ繁る青葉かくれの岩清水くみつゝ夏を忘れける哉

、。同　石狩　阿部まさ子
松風のかよふ谷間の柴の戸にことしの夏もすごし鳧哉
想古めかしけれど調やすらかなり

、。同　京都　中村傳三郎
此夏は山と水とを友としてあつさ知らても過しつる哉

同　波静の家
夏のみは山の庵りにすみかへて岩かき清水友と頼まん

、、、同　薩摩　本田まつ
玉くしけ箱根の山の假宿は夏も忘れてすみよかりける

。同　名古屋　此花庵主人
砂をやく暑さを避くる森蔭の緑の風の淸くもあるかな

。納涼　岩代　渡部幸吉
凉しさに川のべ近く來て見れは水の底にも月やとり鳧

。同　越後　坂口信正
月きよし流も淸しいさ今宵すゝみかさん淀のかは舟

。同　大阪　山田多七
手にならす扇の上に月更て夜風凉しき難波おほはし

、。同　信濃　松林蟻友
浪の音を添へて吹來る浦風はまたきに秋の心地社すれ

、、同　波静酒舍
繁り合ふ木の下蔭の吹く風になつを忘るゝ袖そ凉しき

。同
凉しさに暫やすろふ岩枕あまりは秋のこゝちこそすれ

。同　薩摩　本田まつ
さゝ波にうつる月にも風見えて凉しさ飽ぬ川つらの宿

、。夕立　大阪　山田多七
白雪の峯なす雲のくたけより富士の裾野は夕立そふる

、、、同
よひつきの濱邊はれて夕立は遠く鳴海の沖に懸れり

（以下次號）

社告

本號大附錄に蘆花生の『夏の月』掲載すべく豫告せしも偶筆者恙の故を以て次號に讓ることゝなせり

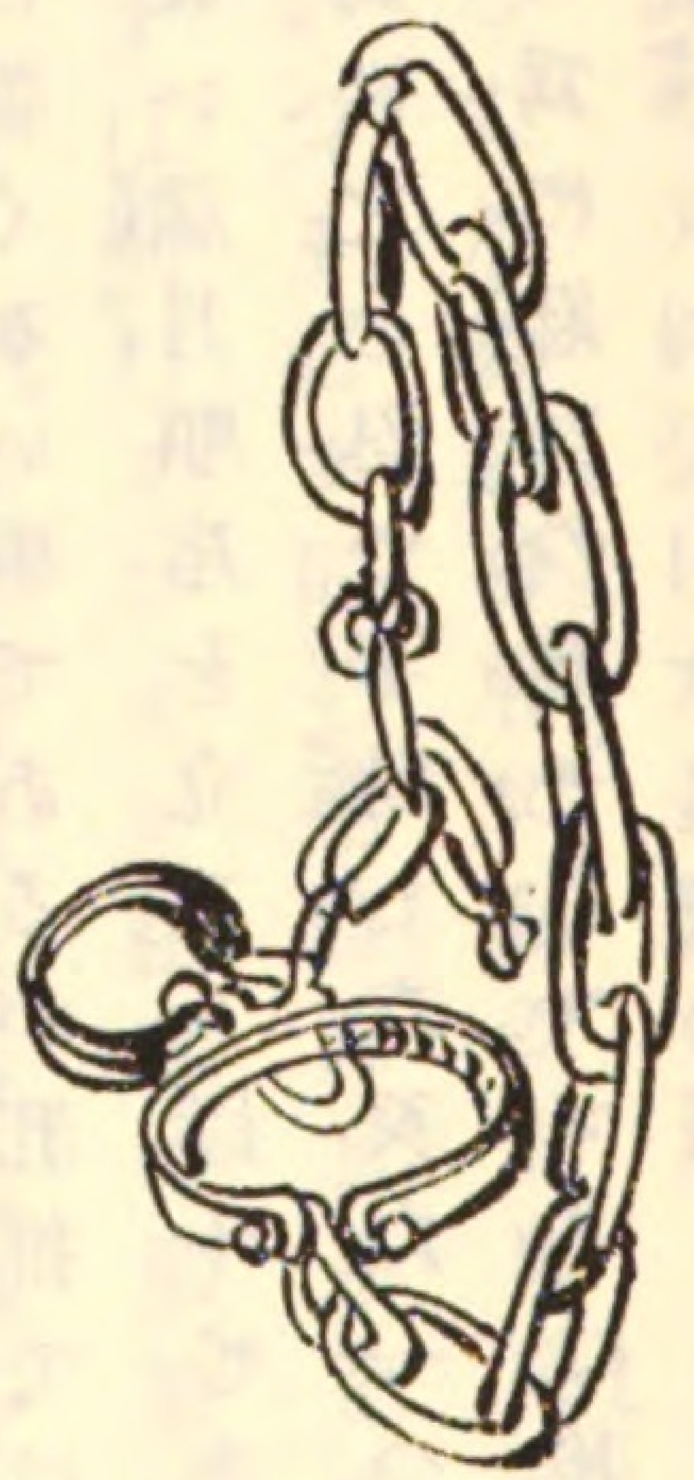
次回歌題

夏海邊　朝顏　殘暑　樵夫

家庭雜誌第八拾參號夏季大附錄

（明治二十九年八月十日發行）

文藝



牢歸り

デッケンス 著
思軒居士 譯

私が始めて此の村に來て住を定めたのは、今から恰二十五年前であつたが、其頃この寺領内の者でエドマンドといふ評判の男があつた。直この近處の小さい島を小作をして、偏意地な荒氣な良くない男で、平生が懶惰で放蕩で、流義が殘忍で兇暴で、唯だ職業もない無頼の成ら

ず者が二三人あつて、之と一緒に野道をぶらついたり、酒店で醉酗したりするばかり外には一個も友達も無ければ、懇意の者も無い。村でも多くは恐れ、皆は嫌ひ、誰も口をきく者が無い。エドマンドといへば世間の除け者であつた。

この男に妻と一個の男の子とが有て、私が始めてこの村に來たときは、其の子は十二位であつた。其の妻の平生の患苦のひどさ、其のおとなしく根よく其の患苦をこらえた辛防さ、其の一人で丹誠して其の子を育てた心細さつらさ、といふ者は、誰も眞に想像するとは出來ない。邪推するといふは善くない事であるが、邪推ではない、私は實に心の底から確信する、エドマンドは、手もなく、長い歳月順序を立てゝ、段々と妻の胸を裂かうと力を盡したのだ。然かも妻は都て其の子の爲に、之を忍で辛防した。又た一つには、一寸聞けば大抵の人には不思議に聞えやうが、其の夫の爲に忍だので。エドマンドは其の通り亂暴で、其の通り自分を慘酷に取扱つたけれども、其の昔しを懷へば、自分も愛しいとおもふ處があつて、夫婦となつたので、昔し愛しかつた時分の事を懷へば、其のつれないと恨む心の下から、亦た彼れもこらえやう、此れもこらえやう、といふ優しい心が涌き出でる。斯の優しい心は、天地の間に生けとし生ける物の中で、女より外には誰にも解するとの出來ないもので。

エドマンドの家は貧乏であつた、又た其の家の主人が其の通りの所行では、貧乏するより外に法もない。然かし其の妻が朝は夙くより、夜は遲くまで、朝、晝、夜、の差別なく、斷えず撓まず働

くのを、一家[illegible]黙はれないで、外かた、或は夜ふけなどに、エドマンドの家のほとりを通つた者が、女の呻き聲や、打擲の音を聞たといふ話は、常の事で。又たエドマンドの子が夜半過ぎに、其の非道の父おやが酔醺して哮けりくるので、内を逃け出して、近處の家の戸を、小さい手で敲いてゐたといふことも、中々一度や二度ではない。

可哀そうに妻は、其の夫に受けた折檻の痕をかくしきれなくて、其の痕のついたまゝで居つたとも、毎度であつたが、始終殊勝に私の寺に参詣して、日曜日とさへいへば、午前の儀式にも午後の儀式にもいつも必ず同じ坐席に、其子をつれて來てすわつて居る。同じ此の邊の細民の中でも、この母子は別してひどい粗末の服装であつたが、然かしいつもサッパリとして、清潔な服装で。参詣の人は皆斯の『可哀さうなエドマンドの神さん』に會釋をしたり、又たは親切な詞をかけたりする。をりに觸れては寺の儀式已でに畢つて歸り途、寺の前の楡樹の並木の下で、近處の人と立ち止つて、一と口二口物を言つたり、又たは其の健かな男の子が、小さい友達と一緒になつて、面白さうに跑けてゆくのを、背後から得意げに、可愛げに、眺め〳〵徐かに歩いてゆくとがある。斯ういふ時には、其の勞苦にやつれた顔が、さも嬉れしげにさえ〳〵して、縦ひ愉快幸福の人とはゆかぬまでも、誠に胸に蟠かまりの無い世の中に不足の無い人らしく見えた。

斯うして五六年を過ぎた。其の子は强壯な、立派な一人まへの若者になつたが、さて斯樣に子どもの身躰を大きくし、四肢を伸ばした歲月は、亦た其の母の腰をかゞめ、足もとをわるくした。斯うなつた時にこそ、其の子が母のそばに居て、介抱もすれば慰めもすべき筈であるのだが、其の子はモウ母のそばに居ない、母は相かはらず寺に參詣して、同じ坐席にすわつてをる、が、其の隣の一席は空てをる。聖書は初めの通り丁寧に其の前に置てあつて、例の通り讀むべき處が折つて、目じるしはしてあるが、母と一緒に之れを開けて讀む人は居ない。聖書の紙には、涙が染みこみ〳〵して、文字も朧ろになつてをる。同じ參詣の近處の人は皆老婦人をいたいたしう思ふから、親切に物を言ひかける、然かし此方は一向すまぬ顏つきで、成るたけ皆の挨拶を避けるやうに〳〵する此頃はモウ楡樹の下を徘徊するとも無い、モウ樂しさうな嬉れしさうな顏を見せるとも無い。いつでもおちきない風で、面を隱くすやうにポンチットを引き下げて足ばやに歸つてゆくのが常である。

何と、どうだらう、右の若者が、全躰自分の幼い時に溯ぼつて、篤と其頃の事を懷ふてみるが宜い、母おやが言ふに言はれぬつらい艱難や、責折檻を食ひこらえ〳〵實に成らぬ辛防をして居つた事より外に、復た何事がある歟、其の母おやが其の通りの患苦を堪え忍で、辛防をして居つたのは、誰の爲だ、皆自分の爲を思ふて吳るばつかりに、然したのではない歟。それに何と、どうだらう、右の若者が、其の母おやが壽命を縮めるほど心を痛めるをも一向構はず、母おや

お前が親の爲に盡くした事も[illegible]した事も悉く忘れて、人が相手にせぬ成らず者と一緒にな

つて、横道〳〵へとそれ込だ。是では仕舞には自分の首には繩を着け、母おやには切ない恥かしい思ひをさすのが必定だ。嘆いても嘆かはしいのは、人の心だ。結局は夙からモウ目前に見えて居るではないか。

憫れむべきエドマンドの妻の不幸不仕合せも、モウ大かた滿點に近よつた。其頃この邊が大さう物騷で、澤山災難に罹つた者が有たが、其の惡者が一向分らぬ。其處で惡者の方は益す大膽になつて一度大げさな强盜を働いた者だから、此から今までに無い意ひの外の綿密な詮議になつて嚴重に探索された所、遂に右のエドマンドの子と、外に三人とが嫌疑を被つて、捕らまへられ入牢となり、吟味され、罪狀定つて、死刑を申渡された。

この宣告文の讀みあげられた時に、一と聲、錐をもむやうな婦人の叫び聲が、裁判庭に鳴りわたつたが、私は今に其の聲が耳について居る。今まで裁判官の糺問にも宣告にも、又た死期の目前に迫て來たにも、平氣で素知らぬ顏をしてツヽ立て居つた小エドマンドも、斯の叫び聲には恐ろしくなつたと見えて、今まで剛情に堅く閉ぢて居つた唇が、自然にビリ〳〵と顫へて、面色は灰のやうになつて、冷たい汗が一ぱいに流れ出し、さすがの頑性な四肢がワナ〳〵と戰慄て、白洲の上でよろめいた。

小エドマンドの母は其の心中の悲慘痛苦に殆ど狂氣のやうになつて私の前に身を投げ伏

して、今まで有らゆる艱難辛苦の間に常に自分を守護したまはりたる全知全能の上帝に、早く斯の悲慘のうき世から、自分を救ひとり、又た其の唯だ獨りの子の命をたすけ給へ、と祈りたてた。斯う祈つて居たが又た此度は、こらえかねて聲を放て啼き出だし、啼き出だしては、又た之を食ひこたえ樣と身をもだえる。實に是時のさまといふ者は、私はもう二度と再び見るとが有らうとは想はれぬ。私が思ふに、是時から斯の婦人の膽は全く裂けだしたのだ。然かし私は終に一度、斯の婦人の唇から、怨みや又たは愚痴らしい詞の洩れたのを、聞かなかつた。誠に見ても涙のこぼれる事であつた。斯の婦人は、それからといふものは、毎日〳〵牢の中へ往つて、其の曲りねぢけた子を善心に立ち返らさうと訴ふる如くたのむ如く、夫は〳〵熱心に、一生懸命に詞を盡くして說き諭した。然かし一寸も其のかひは無つた。小エドマンドは剛情に頑固に推し默つた居るばかりで、少しも母の詞は耳にかけない。其のうちに、死刑がどうかして十四年の流刑に減宥せられた、是亦た望外の恩典であるのだが、小エドマンドは是にも少しも感動した樣子は見えぬ。やはり執念く推し默つて澁面作つて居るばかりだ。さすが久しく斯の婦人を患苦の間に支へて居つて堪忍辛防の精神も、其の身躰の衰弱は支へるとが出來ない。小エドマンドの母は終に病ひの床に就た母はモウ一度其の子を尋ねに往きたいと思ふて蹌踉〳〵する脚を曳きずりながら、床の上から下りやうとしたが、力が無いので其儘パッタリ地に倒れた。

サァ今まで剛情に平氣を推し通して居つた若者が、眞に見事其の平氣を推し通される者か、されぬ者か、といふ事を試驗される時が來たのだ、小ヱドマンドは、今まで平氣を粧つて居たウラが一度に反つて來て、殆ど狂氣のやうになつた。一日が空しく過ぎた、毎日必ず尋ねて來た母の姿が見えない。次の日も亦た空しく過つた、母の姿はやはり見えない。第三日の夜となつた、今日もやつぱり母は來ない。此から二十四時間すれば、自分はモウ母に別れて、此の村を去らねばならぬ、而かも此の別れは恐らく永の訣れである。サァ斯う思ひだすと、久しく全く忘れて居つた幼い時の事が、俄かに歷々心の中に映つて來て、自分は狹い牢の庭の中を忙がしさうに往つたり復つたりかけ回はつた、恰自分が斯う急ぎさへすれば、母の消息が早く聞えるかなんどの樣に。

左樣斯うするうちに、母の消息が知れた、是が知れた時には、現在の自分の賴みの無い、世の中に棄てられ者だといふ事が、又た俄かに歷〱心の中に映つて來た。母、自分は平生親といふは唯だ斯の母一人しか覺えない、其の母が病ひに臥せつて居る、或ひは死にかゝつて居るのかも知れない。而かも其の母の處は、自分の立てをる此の處と、十丁とは離れて居ない。若し自分が自由の身で縲絏の中に居ない身であるなら、只だ三分か五分すれば、直其のそばに往かれるのだ。小ヱドマンドは、戶口に跑けて往つて、鐵の格子に手をかけて、無二無三にガタ〱とゆすぶつたが、又た此度は自分の身躰を壁に投げつけ〱、まるで石の壁を銜きぬいて、其處

から脱け出やうとでもする者の樣だ。然かし堅固な建物は、宛がら斯の男の膂力の弱いのを嘲けるが如く、ビクともしない。小エドモンドは兩手を打ちあはせて、小兒のやうに、聲を放して啼きだした。

私は母の傳言を持つて牢の中へ往つた、それは母は其の子の是までの事は一切ゆるして遣る、此の上は隨分身躰を大切にして達者で居れよといふ趣意であつたが。其の子からの返しの傳言には、其の眞に心から先非後悔したといふと、返すゞも母おやの宥恕を祈るといふとで、私は之を持て病床に臥せつて居る其の母の處にもどつた。是時私は斯の先非後悔した倅が、自分が滿期になつて歸つて來たらは、斯うして母を慰める、あゝして母を介抱すると、種種々の計畫を私に話すのを聞て、誠に感動したとである。然かし是時私の心中には、斯の男が配所に往き着くよりは幾個月前に、其の母はもう斯の世に居ない人であらうと思つて居つた。

小エドマンドは其の宵配所に送られた。それから二三週間たつて、不幸なる婦人の靈魂は肉躰を離れた。私は眞心確信する其の靈魂は必ず永劫無窮の幸福安息の國に往生したであらうと。

婦人の遺骸は私が取りかたづけて、法の如く葬式を營んで、今も私の寺の小さい墓地の中に葬つてあるが、別に石も建てゝはない。渠の痛苦は人が知てなる、渠の貞德は上帝が知ろしめ

す、
罪人の配所に發足する前に、私は罪人と約束して、罪人は其の許可を得次第に、其の母に文通すると、其の手紙は私の名宛にして送るといふ約束であつた。父は其の子が縛に就た時から、一切其の子と面をあはさぬとにして仕舞つたのだから、其の子が生きやうが、死なうが、少しも構はぬので、さて、それから幾年も〱たつたが、一向小エドマンドの音耗が無い、モゥ其の刑期の半分以上も過ぎたのだが、一向手紙が來ない。私はひよつと死だのではないか、と疑つてをつたが、到頭是れは全く死だのだと斷定した。

小エドマンドは配所に着くと、又た直に其處から餘つ程遠い國へ轉送されたさうで、大かたそれ故に、幾通も手紙は出したのだけれども、終に一通も私の處へ屆かなかつたのだ。小エドマンドは全十四年の間、一寸も移動無しに此處で其の役を勤め、愈よ滿期となつたが、堅く昔しの決心を守つて、母に誓つて置た詞を履んで、色々の限り無い困難の中を冒して英吉利に還つて英吉利に上陸してからは、又た徒歩で其の故郷へ歸つて來た。

時しも八月の、ある快よく晴れた日曜日の午後であつた、ジョンエドマンドは、自分が十數年前汚名を貽して立ち去つた自分の村へは入て來た。其の路すぢが、恰ど私の寺の墓地の中を通るやうになつて居る。エドマンドは石段を跨いで寺の境内には入ると、俄かに胸が高ぶつて波をうつた。今しも高い楡樹の枝々の間から夕陽がさし込で、緑陰の影濃やかな並木道に此

處彼處其の美しい光を曳いてをるのを見れば、恍惚として心中に現はれるのは、其の幼い時の事で。其の母おやの手にすがつては、此處を通つて寺に參詣した自分の姿が、今も目前に見えるやうだ。自分は幾度となく首を仰むけては、母の蒼ざめた顏を看あげる。時によると、母は自分の面を視つめる兩眼に、一ぱい涙を湛えて居て、自分に接吻しやうと俯む拍子に、其の熱い涙が、はら〳〵と自分の額にかゝつて、何とも譯は分らぬが、自分も一緒に悲しくなつて來て、共にもらひ泣きをする。又た自分が自分の遊び友達とふざけ〳〵斯の並木道を跑けて家に歸つてゆくとも、毎度の事であつた。跑けながらも、幾度となくふり返つては、母のにこ〳〵してをる顏を見たり、又た其のやさしい聲をかけるのを聞たりする。

斯う思ふて來ると、又た思ふ、それから自分はどうだつた、母の親切な詞は無にし、戒めは用ひず、約束した事は皆な破ぶり。斯う思ひだすと、それからそれ、夫から夫と、無數の考へが一緒に一時に浮で來て、自分にも分らなくなつて來て、到頭モウ耐らえきれなくなつた。

禮拜堂には入つた。午後の儀式は已に畢つて、參詣の衆は已に散じたあとであつたが、堂はまだ閉めずにあつた。自分のあるく足音が、一歩毎に低い建物の內ぢうへ、カァン〳〵と響きわたつて、誠に靜かで寂しくつて、自分の外には誰も人が居ないのかと思ふやうだ。熟ら四下を看まはせば、何も一つとして、昔しにかはつた者は無い。唯だ堂の內の廣さが、自分が想ふて居つたよりも狹いやうに見えるだけで。子ども心に毎度勿躰ない尊い者だと思ふて仰いでを

つた古い像碑も、やはり其處にある。クションの色の褪めた小さい說法壇も、其處にある。自分が母に隨いて每度殊勝に其の前で誠條を念誦した祭壇、而かも子どもの時には善く念誦して、大人になつてからは全で忘却した誠條だ、其の祭壇も、やはり其處にある。自分たちの昔しの坐席に往つて視た、坐席は寒むさうで、今は人の來てすわる者も無いらしく見えた、クションは除つてあつて、聖書も置てはない。大かた自分の母は此ごろは外の末の方の坐席にでも、來てすわられるのであらう。それ共モウ身躰が不叶ひになつて獨りでは參詣が出來なくなられたのかも知れぬ。トまでは想ふたが、其の最一つさきは想ふのも忌はしいから、想ふて見るとも得爲なかつたが、身躰ぢうが寒むくなつて、ワナ／＼とふるひ出したから、急にあと返りをして、其處を出た。

堂の前に出て來ると、向ふから一個老人が此裡へは入て來た。ギヨツとしたのは、自分は善く斯の男を識てをる、斯の男が每度墓地で穴を掘てをる處を、自分は見て知て居る。斯の男牢歸りの自分を見たら、何といふであらう歟。

老人は看慣れぬ人だといふ風で、顏を瞻たが、只だ『好いお天氣で』と挨拶して、徐かに內へは入ていつた。老人は自分を見忘れたのだ。

丘を下つて、村の內には入て來た。天氣が煥かなものだから、道旁の家では、皆或ひは門口に椅子を出して腰かけたり、小さい庭に出てぶらついたりして、夕かたの景色を賞し、休日を樂しんで

をる。看慣れぬ人が通るから、皆めづらしさうに、自分の方を視る。自分も誰か自分を見覺えて居つて逃げこむ者でも、ありはせぬかと、兩側を視い〳〵あるいたが、大抵の家は多く識らない顏ばかりだ。中には又た、昔しの學校友達が、此の前見た迄はまだ子どもであつたのに、今は大きな形になつて、大勢のいたいげな子どもに取り卷かれて居るのや、又たは自分は只だ筋骨たくましい勞働者だ、とばかり覺えて居つた人が、よぼ〳〵とした翁さんになつて、小さい家の門口で、安樂椅子にすわつて居るのを見た、自分には直にそれと分つたが、然かし先方では皆自分を見忘れて居つて、自分は、全く是迄見たとのない人で通つた。

到頭一軒の古い家の前に來た、エドマンドは足を停めて立ち止つた。是時夕陽はもう消えかゝつて、家の外に積である黃色の小麥の束が、殊に鮮やかな光を放つて、菓物畠の木の影が、長く地の上を曳いて居る。斯の家こそ、自分が配所に居て哀しいつらい長の歲月を送る間、懷かしい〳〵と思ひつめて、一刻片時も忘れたとの無い、自分の生れて育つた、其の家だ。自分はイツバシの高塀であつたやうに思つて居たが、今見れば何でもない低い築土なので、築土越しに庭をのぞいて視ると、昔しよりもズツト木が多くなつて、昔しは無かつた美しい花が咲きみだれて居る、然かも又た其の間に、見覺えのある古い木も、だん〳〵有る。自分が毎度遊びくたびれては、其の下に往つて、橫になつて日向ぼつこをして居るうちに、心持がよくなつて、睡りを催し〳〵した、其の木も、やはり彼處に見える。家の中に人聲がするので、耳を欹てゝ聽て

見たが、全で聞たとのない人の聲で、誰だか一つも分らない。それに、さも面白さうにガヤ〳〵と言ふてをる。自分の母ならば、斯んなに面白おかしう暮らしてをる筈が無いとが分つてをるから、自分は築土を離れて、身をあとに引いた。とたんに、家の戸があひて、一群の小さい子ども達が笑ひふざけながら外へ跑け出した、父おやと見えて一個の男が、一個幼い男の子を抱いて、又た戸の口に現はれた、之を見ると前の子ども達は其の周圍を取り巻て、皆小さい手を拍きながら、阿爺を自分等の遊び仲間へ引ぱり込まうとして、頻りに推したり挽いたりして居る。エドマンドは之を見て、自分が幼い時恰彼處で、幾度と無く、父おやの姿を見ては逃げ出した事のあつたのを憶ひだした。又た自分はブル〳〵ふるへながら、蒲團を頭からかぶつて居ると父おやが叱り詈しる聲、打擲する音、母をやの泣いてわびる聲、歴々と耳に聞えた事も、實に幾度だつたか數へきれない。

エドマンドはモウ胸がたまらなくなつて、忽ち大聲を揚げて啼きながら、其處を立ち去つたが、氣が取りのぼせて目がくらむ様なのだから、拳を握りつめ、歯を食ひしばつて、それは恐ろしい見まくであつた。

自分が長の歳月待ちに待て、之が爲に、あんなに多くの艱苦をも堪え忍で樂だ故郷の味は、斯様なものであつた。善くまァ歸つて來たといふて、自分を迎へて呉る人が、一個あるでは無い、善く改心してもどつたと云ふて、自分の先非を宥恕して呉る人が、一個あるでは無い、自分を

納れて呉る家一つあるでは無い、自分を扶助して呉る手一つあるでは無い、而かも是れが自分の故郷、ふるさとだ。是れでは、人一個見るとのない、深い恐ろしい林の中に、獨りで淋しく居つた時と、何程のかはりが有る歟。

おもへば自分が縲絏の辱めを受けて遠い國に處て居て、始終思ふてをつた故郷は、最初自分が立ち去た時斯うであつたと云ふ*

※故郷なので此れから自分が歸つていつた時は斯うであらうと云ふ故郷ではなかつたのだ。今實際の故郷を見れば、情け無うて哀しうて、元氣がぬけて人に逢ふて物を問ふ精も、訪ねていつたら親切に憐れがつて自分を迎へて呉るだらうと思はれる唯ッた一個の人の處を、訪ねやうと云



ふ精も、無くなつて、フラリ〳〵歩いて行つた。」
エドマンドは、何かすまぬ事をした人が歩くやうに路の片わきを歩きながら、かねて自分の善く知てをる廣い牧場の中へ、は入て來た、牧場には入ると、兩手で自分の顏をおさへて、其儘草はらの上に倒れ伏した。
エドマンドは氣が着かなかつたが、自分のわきの坡の上に、先きに一個臥せつて居た男があつた。男は今其處へ來たのは何者だらうと、ソツト視やうとして、ふり向く拍子に着物の音がザハ〳〵としたので、エドマンドも頭を擧げて其の方を視た。



男は半分起きあがつて、すわつたが腰は大さう曲つて、面は黄ばんで皺だらけで、其の服裝から推して見ると、何處かの工作場の者らしい。大そう年をとつてをるやうに見えるが、それは齢の所爲よりも、不養生や病らひやの所爲の方が、多いやうに見える。男は其處へ來たエドマンドの顏を、ジツト視て居つたが、暫し之を視てをるうちに、最初は曇つて重たげであつた男

の雨の眼が俄かに輝やいて、非常に錯愕した樣子を現はしたが、終には一心に看入つて、兩の眼が飛び出しはせぬか、と想はれるばかりになつた。エドマンドも次第に起き直つたが亦ただん／＼熱心に老人の顏を看入つた兩人良や久しくの間無言で、互ひに面を視つめて居つた。

老人は死人のやうに、まつ蒼になつてふるへながら蹌踉／＼と立ちあがつた。エドマンドは、ツカ／＼と老人の方に跑けよつた老人は一と足二た足あとに退つた、エドマンドは再び前に進だが、つまッた樣なカスレた聲を出して、

『あなた私に物を言つて下さい』

老人は恐ろしい聲を揚げて『退け』。エドマンドは倘ほ其のそばへ進みよつた、老人は再び『退け』と叫だが、怖ろしさに前後を忘れて、其の笻を揮りあげて、エドマンドの面の上を横すぢかひに、ハッシとばかり擲りつけた。

エドマンドは歯を食ひしばつて、

『阿爺―畜生』

とつぶやいたが、驀地に飛びかゝつて、老人の喉を締めつけた。然かし老人は自分の父である。氣がつくと直に手が自然に解けて喉を離れた。

老人はアッといふて高く叫だが、其の叫び聲は淋しい野原に響きわたつて、惡魔の吼る聲

のやうに聞えた面の色は黑くなつて口と鼻とから血が流れ出して蹌踉〳〵とよろめいて仆れると草はらが全で紅の色に染つた。老人は血管が破裂したのだ倅が扶け起さうとして見たがモウ死だ人であつた。

* * * * * * * *

前に話した墓地の一隅に、斯の事の有た後三年の間私の寺に使ふて居つた一個の男が葬つてあるが其の男は眞に心から自分の昔しの惡かつた事を後悔して、身をへり下つて、罪障の消滅ばかり祈つて居る、めづらしい奇特の男であつた。然かし其の男の存生中は、私より外に、誰も其の男の何者で何處から來たものだ、と云ふことを知た者は、無かつた。

其の男は即ち牢歸りのジョンエドマンドであつたのだ。

（完）





大森村　磯邊千波

其上

見わたす限はる〳〵と
綠につゞく田のもあり
田のもの奥は里わにて
夕げのけぶり色うすく
里のこなたの磯ぎはに
老木の松のなみ木あり
立ち並びたる絶間より
見えすく白帆四つ五つ

八幡の森になくせみの
暑さも上ぼす聲たえて
今まで見えし安房の山
上總の峰もみえわかず
ゆふべすゞしき浦風は
滿ちくる汐に伴なひて
羽田の沖のおきとほく
漁火のかげきらめきぬ

夜の御神はおしなべて
　か黒き布を引きはへぬ
おほひ果ぬる程もなく
　あかき光をしるべにて
いさよふ月はひむがしの
　海路遙かにいでにけり
黄金の波にしろがねの
　鏡のせけむとばかりに

みやこに近き里ながら
　みやこの塵は通ひこで
面のもをわたる風清く
　波路をてらす月きよし
静けき夜半を唯ひとり
　我物がほにしめなして
松の木陰を行かへり
　さまよひありく男あり

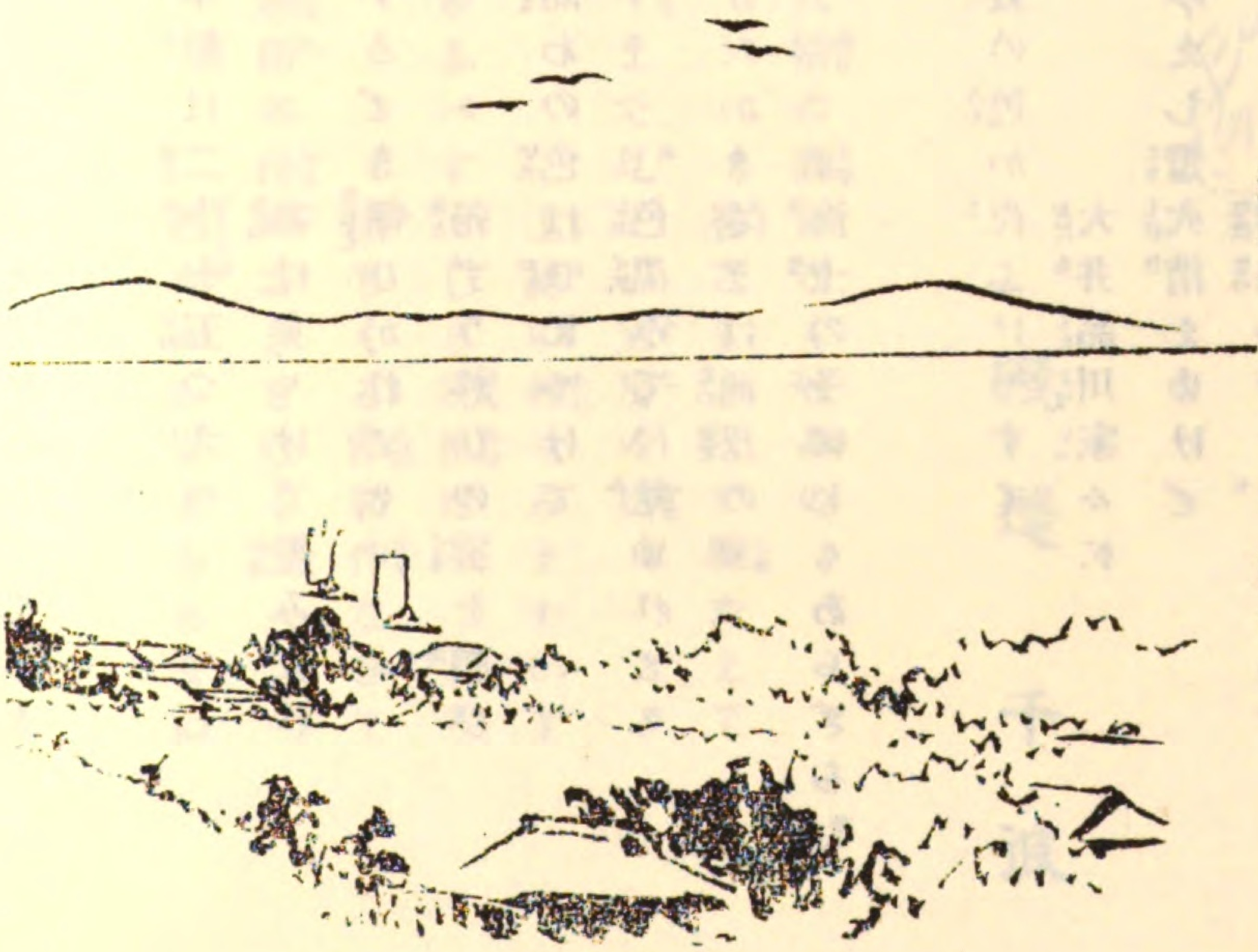
年齢は二十を五つ六つ
　衣はすゝけて髪みだれ
するどき眼ひかれども
　絶ずうれひの雲を帯び
面わの色は日にやけて
　色黒みては見ゆれども
けだかきさまは此里の
　海士の子にしもあらざらむ

夏の短か夜ふけやすく
　大井品川家々に
みえし燈火消えゆけど
　猶松かげを立ちさらず
さやけき月を仰ぎては

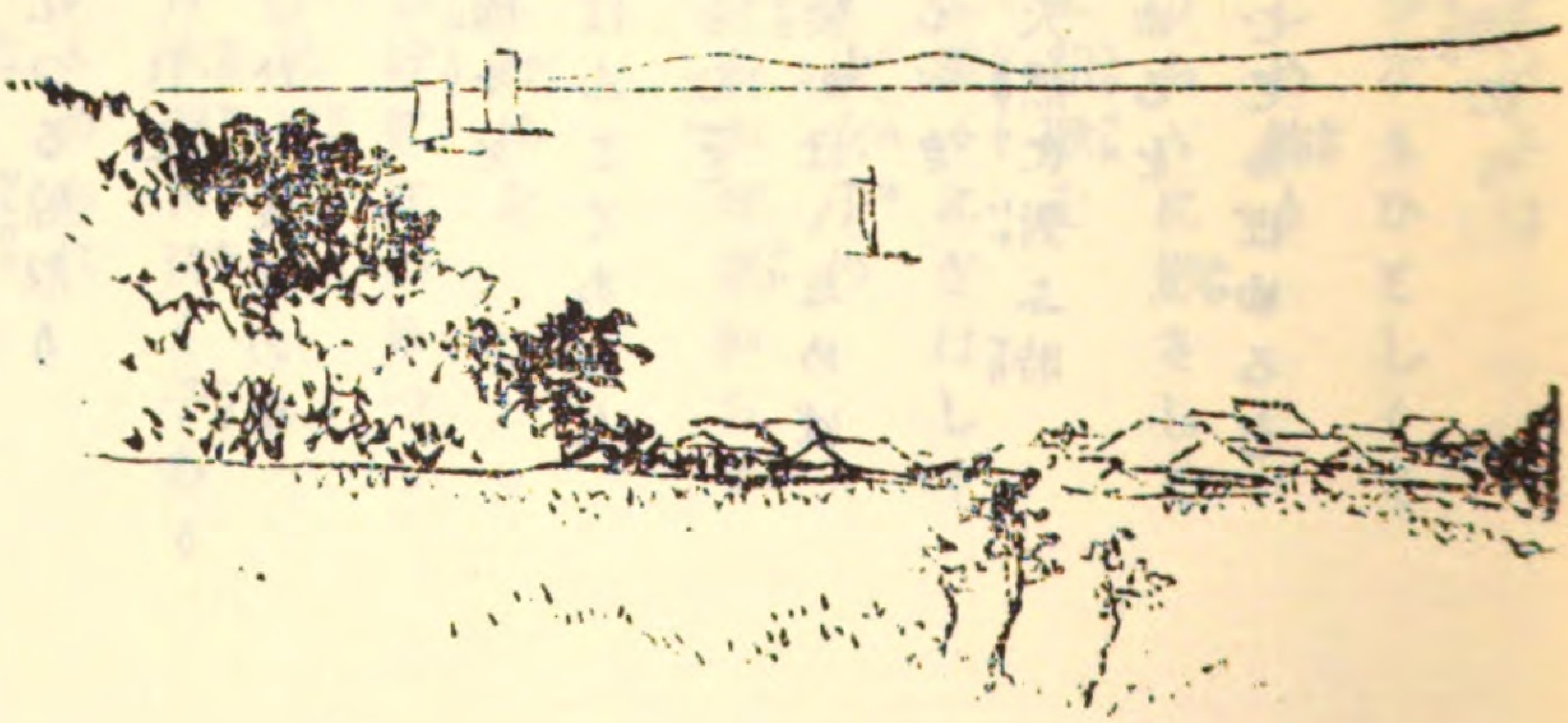
くもる心やかこつらむ
來よする波にむかひては
つゝむ思やかたるらむ』

＊　＊　＊

この若人がこの村に
來つるは去年の冬なりき
木がらしの風荒ましく
雪けをさそふ夕ぐれに
長き旅をやたどりこし
肩はまよひて袖やれて
疲れたる身をよせかけて
並木のもとに休らひき
大森村のむらはづれ
海にそひたる家ゐあり
主人は日々に魚賣ると
近き里わをうりありき
妻は日ねもす麥わらを
編みてつくりて暇なく



富りといふにあらねども
　足らずとかこつ事もなし
ある日の夕べ歸り路に
　疲れしかれを見出にき
田舍の人のまめやかに
　かばかり寒き雪もよひ
まだ若き身のいとほしと
　いと懇切にいたはりて
程とほからぬわが宿に
　かれを誘ひ歸りけり
志ばし病をやしなふと
　宿りしほどに住つきて
海を見わたす離れ屋に
　かれはこもりぬ唯一人



ひとりこもりて朝夕に

波路遥かにながめては、
何すともなくあるまゝに
主人妹脊はあやしみぬ
常に憂ひをふくめれど
やさしき心しるければ
あやしみつゝもさら〳〵に
あやしき人とおもほえず
朝けゆふけに逢みれど
詞かはさぬときもあり
時によりてはゆくりなく
語りつゞくる折もあり
かたるはいつも海山の
あかぬ景色の物がたり
中禪寺の湖づら淺間山

春日の宮み小豆島
つしまの海にさすらへて
月夜に見つる鯨取り
根室の野路に行くれて
道をまよひし夜半の事
『さばかりとほき國々を
歩き給はんことあらじ
昨夜の御夢を交らむ』と
主人の妻がほゝゑめば
『など僞言をかたるべき
われは天然に對ふ時
兄弟のごとおぼゆるを
我妻のごとおぼゆるを』
『さるけしきよき境にも

留まりませでいかで君
かゝる海邊に住ます』と
主人がとへば聲ひくゝ
『夫婦の君がかくばかり
あつき心と一つには
此海ぞひのなつかしみ
されどもそれは言がたし』
『語りませぬはつらけれど
つゝみ給ふは詮もなし
うるはしかりし海山の
景色はすでに聞き侍り
旅のゆくてに美はしと
見ましゝ人をいさゝかは
洩しませや』と語らへば
答はなさでうつむきぬ」

年立かへるのどけさは
都もひなもひとしくて
つなぎし船のしめ飾り
朝日うらゝに影さして
醉ひのすさびに船歌を
うたふ聲々にぎはしく
羽ねつきかはす少女子の
袖のうらかぜ寒からず
あそぶ童のひとむれを
羨ましげにながめつゝ
破れし紙鳶を手に取て
ひとり大路に泣く子あり
しひて主人にすゝめられ
今しも門に立ちいでゝ
あたり眺むるかれはしも

『いかで泣くぞ』と問たりき
『母にねだりて唯ひとつ
買てもらひし此紙鳶を
あの松の木に引かけて
かくきれ〴〵に引さきぬ
なさぬ中とて常々に
しかられてのみある物を
父買てとはいひがたく
なくては共に遊ばれず』
泪ながらにかたらふを
『よし〳〵さらば暫時待て
これよりもよく繪がきてむ
暫時まてよと言さしつ
紙うる家にとくゆきて
あがなひきつる西の内

泣く子と共に打つれて
離屋の内に馳せ入りぬ
旅のつゝみを珍らしく
今日しも解きし其中は
刷毛に繪筆に繪具ざら
こまかくかきし草紙あり
半かきたるきぬもあり
かれは繪筆を濡しつゝ
みるめの前にさら〳〵と
ゑがき出けり武者の繪を
彩色えて張りて糸つけて
しばし日向に乾かせて
『はや出來ぬ』と幼な子が
よろこぶ樣を嬉しげに

『いざとく行て遊べかし
今より後もやぶりなば
泣かずと此處に持てこよ
書て得させんいつにても

さぎの程よりあやしみて
見てし主人は聲だかに
『さては畫師にておはせしか
あの面しろき武者ぶりを
惜き事よ』と語らへば
『隱しゝ職業の顯はれつ
いかにかせん』といつになく
心地よげにも打ゑみぬ』

富士の高嶺は佐保姬の
霞みの袖につゝまれて
かすかにみゆる池上の
杉の村だちうちけぶり
蒲田小向井とり〳〵に
梅見につどふ人しげく
四方の景色は春めけど
かれは家にぞ籠りける

玉川ぞひのもゝばやし
咲ぬと人の告ぐれども
たれこめてのみ過しつゝ
あだに暮しぬ長き日を
あるじ妹春は今さらに
あやしの人といふ程に
四月はじめの比よりは
あやしさいとゞ增りけり

さてもいかなる事ならむ
怠りがちにありし身の
木格に對ひてしばしだに
繪筆をはなつひまもなく
唯かりそめの一ふでも
ふかく心をそゝぎつゝ
ひるは終日いそしみつ
夜はよすがら寐もやらず
しばしの程と思ひしを
十日廿日となるまゝに
『あまりの事よさても身に
障りやせん』といさむれど
あるじの詞きゝいれず
猶も繪筆をさしおかず
眼くぼみておもやせて
力なげにはみゆれども
まろめし絹を持ながら
打たをれゐる時もあり
やぶりし紙を打くべて
烟ながむるをりもあり
朝まだきより立いでゝ
夕べになれど歸りこず
紙のかきさし携さへて
夜ふけて歸る事もあり
かくて春くれ夏されど
日々に其身のやするのみ
かけどもかけど敗る繪の
成るべき時はいつならむ
宿りし折にあづけつる

こがねは既に盡ぬれど
あるじ妹春はあはれびて
たゞ一言もいはざりき」

※　※　※　※　※

夏の夜早くあけそめて
たゆたふ雲の色あかく
沖にあかしゝつり舟の
數もあらはにみゆる比
松の木かげをはなれつゝ
かれは家にぞ歸りける
歸るすなはち美はしく
ゑがきし絹を引さきぬ
『よすがら見つる天然の
大いなる畫にくらぶれば
などわれながら我技の
みにくかるらむかくばかり
利益の爲に名の爲に
筆とらぬ身をいかなれば
美の大神のいさゝかは
あはれとだにも見給はぬ
別れまつりて年ふれど
父の御をしへ胸にあり
わが怠りをせめましゝ
母の御遺言むねにあり
心につきしかの鏽は
鈍らしつるか斯く迄に
年の三とせを山水に
洗ひ去れども消ざるか
希望は高くひあくして

よしや世人の容れずとも
愛の言の葉ゆめにして
よし彼人はわするとも
いかで自らすつべき』と
思ひおこして又さらに
筆のいのち毛かくながら
きれん迄はと取そめぬ』
其中
天つ日かげのきらめきて
波路をわたる風もなく
あつさわりなき日盛を
わづかのひまも休らはず
勤しみたりしかひありて
十日あまりを過ぬるに
ゑがきいでたる天女の圖
あるじ妹脊は驚ろきぬ

我身ながらも此度はと
おもふ心のゆるびより
幾夜を更にまどろまぬ
日比のつかれ出にけむ
天女のおもわながめつゝ
ゆめ現ともわかずして
畫師の心は五とせの
昔のはるにかへりけり
あした長閑けき大森の
小だかき岡の芝はらを
姿かたちもたぐひなき
少女と共にあゆむなり
かれの父とは親しくて
かれをはげまし助けつる
子爵の君も打つれて

そは少女子の父なりき
身はたちまちに白雪の
ふるき家ゐに筆とれり
ひろき此世にたゞ一人
われ知る人を頼みにて。
さがなき友はとひ來つゝ
あざみ顔なる物がたり
夢かあらぬか彼の君が
同じ族らに嫁ぐてふ

畵師は今しも高どのを
おりんとしつゝ猶豫ひぬ
『われはかばかり涙なく
つめたき世とは知らざりき
世をば恨みじ我から』と

いふ聲いたくふるへつゝ
いでゆく奥に少女子が
忍音になくこゑすなり
窓うつ雨のはげしきに
現のゆめはやぶられて
畵師はあたりを見廻しぬ
共に語りしたのしびも
始めて聞きしおどろきも
別るゝ折のくるしびも
跡はかもなく消ゆきて
われより外に人もなし」

其　下

桐の一葉のおちそめて
世は秋風の立ちにけり
淺ぢの露も置そひて

虫の音しげく成にけり
箱根わたりに此夏の
暑さゝけつる貴人を
のせし瀛車は今もかも
大森村をすぎむとす

窓おしわけてつく〴〵と
ながめがちなる少女あり
走り穂見ゆる千町田の
田中の道のつゆわけて
さまよふ畵師をみるまゝに
少女も畵師もおどろきぬ
瀛車は早くはせ去りて
たなびく烟いろふかし」

[illegible]

深きこゝろの悲しびを
つゝむが如き少女子と
母にやあらむ年たけて
尊とき人とおぼしきが
此村にしも來りけり
あまたの人にとひ聞くは
いかなる家にゆくならむ
此處に彼處と尋ねつゝ
魚うる家をおとづれぬ
主人は今日も商なひの
道に朝とくいでたちて
あるじの妻は二人をば
あやしみ顏に迎へにき
老女の詞きくまゝに
『殘り多しやさてもそは

よにもあやしき彼人は
　去年の冬よりこゝにみて
年も若きにいとほしみ
　及ばん限りつくしゝを
昨日のひるまゆくりなく
　『又も旅路にゆかむ』とて
我ら妹脊があまたゝび
　とめしもきかで出ゆきぬ
『すぐれし畫師と成たらば
　去年より受しむくいせむ
もしもとひくる人あらば
　これを見せよ』といひ置て
殘しましつるものありき
　いざ此方にと誘なへば
打しをれたる少女子は
　母のあとべにしたがひぬ
高嶺はるかに落たぎつ
　瀧つ河内のいはかどに
咲みだれたるさゆり花
　折らむとすなり幼子は
もし其花をたをりなば
　青かき淵におちいらむ
わな危うやとみ空より
　天つ少女はおりむとす
あはれいかなる畫だくみが
　ま心こめてゑがきけむ
わくに張たる畫のさまは
　此世のものと思ほえず
瀧のひゞきはめの前に

たぎち落くる心地して
天つ少女はこゝにしも
天くだるべく見ゆるなり
少女も母ももろともに
詞もなくてながめしが
少女はつひにたへかねて
母のかたへに泣ふしぬ
空のならひの村さめは
折しも窓にそゞき來て
き寄する波の音たかく
そゞろにさむし秋の風』（終）



葡萄園

金子春夢



（一）

郊外池上本門寺の境内、温泉宿光明舘の奥二階の眞中の座敷に中元節過より避暑を兼ねて身躰の保養のため逗留せる二人の女姓あり、一人は三十七八の年増なれど、まだ一番形の大丸髷を直高に結び、五分珠の珊瑚根掛に、濃紫の手柄とは、どこまでも若姿なり。

一人はまだ十七八のうら若き女姓、色雪ほどに白けれど、白粉の力を假りしとも思はれず、瓜實にもあらず、丸顔にもあらず、それとこれとを折衷したるやうなる容貌にて、鼻の高過ぎると、口元の締り過ぎるは、ちとどこかに權ありて愛嬌に乏しき嫌はあれど、兎も角も美人なり、髪を品のよい上捲といふ束髪にしてすべて淡泊したる風あるは、前の年増と性質が餘程違ふらしい。

母子か、さうでもないらしい、姉妹か、さうでもないらしい。

宿帳に記しある所では丸髷の方は某省の某課長の妻君、束髪の方は同じ官省へ勤むる官吏の娘、前のを高梨まさ子、後のを田邊松子と呼びぬ。

もう此館へ來てから一週間ばかり、まさ子は恐しい活潑で而も多辯に引代へ、まつ子は今時の娘には珍らしいほどの内氣で、而もむつつりとした性質、一つ座敷に居て高笑をするといふ事はなく、稀に轉げて笑ふやうな賑あるは、斯館の頓興な女中と、政子と此頃懇意となつた向座敷の水野といふ男と、一所に集つて洒落でも言ふ時ばかり

水野といふ男は、年齒廿四五、神田猿樂町に住んで居る、書生でもなし、紳士でもなしといふやうな風采、一人でぶらりと斯館の最上等室に、もう三四週間も贅澤をきめ居るといふ境界、眞逆に書生にてはあらざるべし

水野と右の二人の女姓が近しくなりしは、ツイ二三日前の事にて、まさ子とまつ子が本門寺の境内を散歩してありし折柄、端なく毎日顏を合せ居れど、ついぞ口を開きしことなき水野と邂逅し、先方から言葉を懸けられては、愛想好の、多辯の政子と、談話がシックリ合ひて、男がこれが骨堂だの、これが經堂だの、これが會式櫻だのと、方々を案内するに連れられて、二人は面白き夕方を過し、同じ家でも座敷替れば、品かはる、晩にはチと遊來にと、政子が程のよい御世辭が、抑政子、松子と水野が交際を始めし濫觴。

水野と交際を始めてから、相手欲さの政子の座敷は、俄に賑々しく、風の吹き廻しにては、一つ

谷を隔てしむかふの座敷まで手に取る如く、高々と談話の種が聞ゆるものには罪はなし、今日も二時過の暑氣凌に政子、松子は四時近くなるまでころりと華胥の國に遊びしが、松子目を覺せば、犬遣となり此方の隅から向方へ、すたこらと椽側の掃除に忙しき女中、ア、と一息、身を反らして、雑巾で顔を拭き、屋前屋後の樹々には蜩聲を限に今日の日影を惜みて騒がし。

オヤ飛んだ所を目つかりましたよ雑巾で顔を拭くと美人になるさうです、だがお孃樣なんかア要らない事です、オホホホ、と女中のりんは笑つて、もう掃除も悉皆濟みましたから、お目覺に煎茶を持つて參りますよ、其間にお顔をお洗い遊ばせよと立つて行く。

松子手拭を提げて下へ行かんとせば、お松さんお待ち、私も一緒に。オヤ奥樣お起き遊ばしてハイ唯今では御一緒に參りませう、と長廊下を降りて行きぬ。

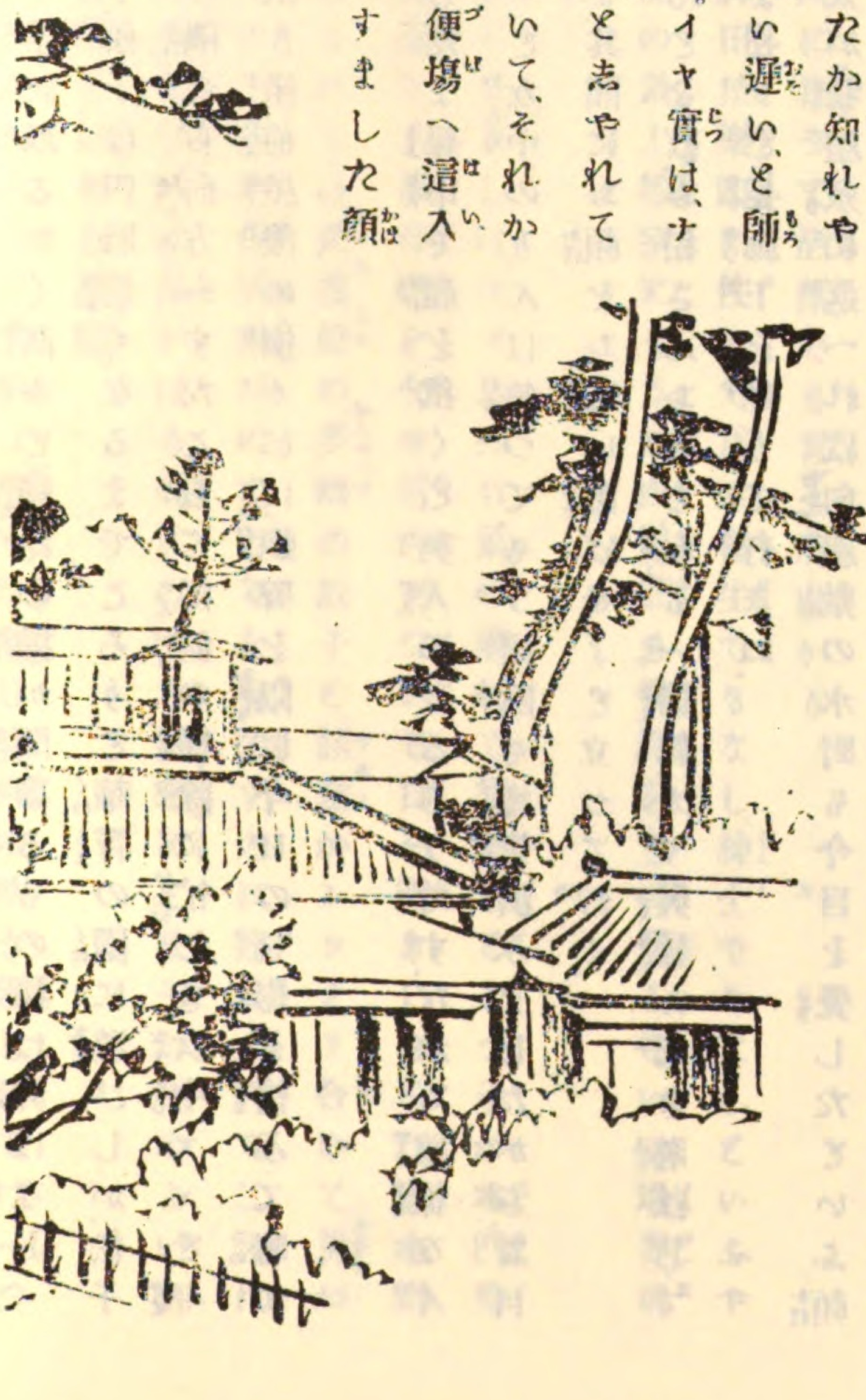
ア、好い心地になつたと、二人が我座敷に返へれば、向座敷の水野も今目を覺したといふ顔で此方を向いて默つて笑つて椽側に立てり。

政子は微笑を含みて、ちよいと手招をせば、男は首肯く、茶道具を運び來りし女中りんも同じく手招して入らッしやいよと黄色な聲で叫ぶ。

よし、きた、今洗面をして、と男は返事をして、忽ち影がなくなる。

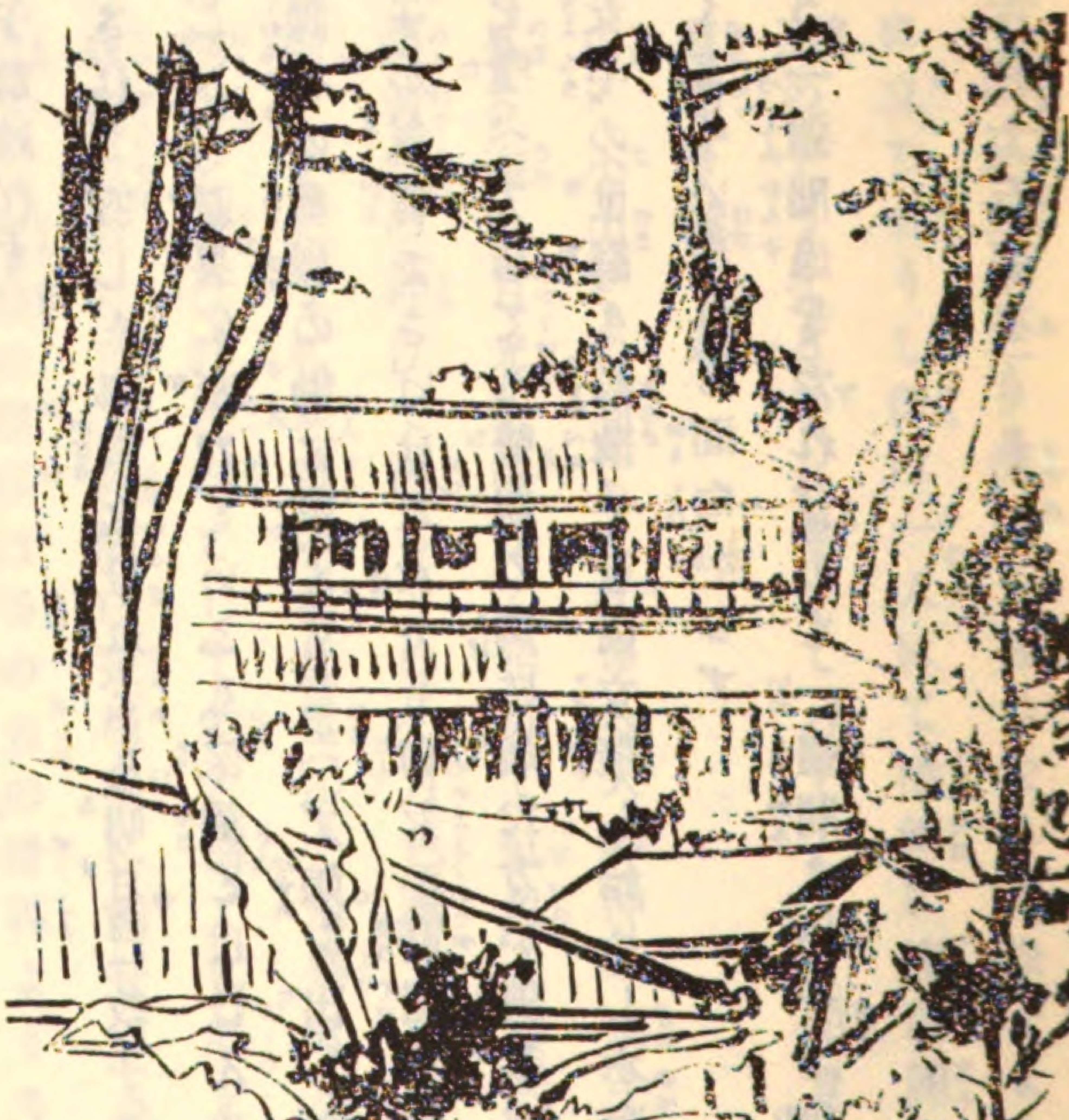
面白い人だ、氣輕な、私大好、そしてね、おまつさん、お前さんに、餘程でざッてるよ、とちよいと閨

扇の柄で松子を衝き、だから、嘲弄うや、どうせ遊興に來たんだもの、澤山遊んでやらうよと政子言へど、奥さん、そんな御串談をと、松子急に眞赤になる、さ、澤山おごッて頂戴、お嬢樣とりん笑ひ、水野さんどうして遲いだらう、なにをして居るかとおまさと女中がつぶやく所へまだ眠たいといふ眼をして、水野此方の廊下の端から顯はれて、何だか氣取つた歩振にて悠々此座敷に來り、これは大きに、遲なはりしは拙者無調法、とワザと芝居かゝりて襟を正せば政子水野さんどのくらいまつつたか知れやアしない、本當に演劇なら遲い遲い、と師直の臺詞でもきめたくなる。イヤ實は、ナニ顔を洗つて。それから石鹸と志やれて、それから齒を磨いて、髮を梳いて、それからずつと、實の處は、今まで大便場へ這入つて居たもんだからと、水野すました顔で物語れば、なァにりんちやんさうではないねへ、水野さん、引張凧だから、て丶からもそこからもさ、男子



に生れて水野さん位なら本望だ、どこへ行つても待人ばかりでお羨しい、どんな月日の下にお生れ遊ばしたか知らん、と政子はりんとちよいと顔を見合せ外を向いて低くチウと鼠の音。

さうとも／＼、先づ差當り待人が三人あると、と男が反身になれば、りんは水野の胸倉を掴みさ、其三人を話さないと、死んでも放さない、とこづきまはす眞似をする、さう小衝廻されちやァ閉口々々實は其三人はめかけてかげ、鼻つかけでもない、本當は貴兄の餓鬼が、大森の麥藁細工を待つて居るよ、兄貴の餓鬼だァ、ヱッ、廢止やァがれと、りんを突き倒し後に飛び除く機會に、こつツり後頭を柱にぶち當て、ァ、痛い、忌々しい、昨夜はりん坊の寢間で、厭てへいふほど枕で擲られるし、ェ、下直な男だ、ァハヽヽヽと大口を開いて笑へば



おまさもりんも轉げて笑ひ、流石に沈默質の松子も水野の可笑味に堪えかね、袖にて顔を掩ひて笑を洩しぬ。

(二)

其翌日政子には、東京の宅より書面來り、至急の用差起りしにつき、一日泊のつもりにて一日歸宅すべしとなり、政子は取るものも取あえず、明日は一番汽車にてこゝへ來るよしを言ひ置き、松子ひとりを殘して正午前歸れり。

松子は一人ポッツリ居殘されて寂しき事限なけれども、明日は政子の歸り來る約束なれど實は一刻も早く歸りたし、こゝへ避暑に來たといふも保養とはほんの名ばかりにて政子の隨行同前、松子の家にても課長の奧樣の勸に厭とも言へず、娘を出したわけ、松子は政子とは性質が違ふゆゑ、いくら政子が氣輕で、さばけた女でも、何だか窮屈で窮屈で保養が保養とならず、此位なら自家で茶漬を喰べて居ても、雙親の側に居た方が得策だと思ふも無理はなし政子の洒落も聞き飽きて、女中の世辭も輕薄で、近頃交際し始めし水野の瓢輕も騷々しく、何も何も、何事も、見るもの、聞くもの、いづれも面白からず。

始が二週間の約束なり、もう一週間過ぎたればあと一週間と松子は我宅へ歸る日を數へて待ち詫びぬ。

今宵は望の夜なりき、舊暦六月十五夜なりき。

先程水野は松子の座敷に來て、何かゴツゴツ私語を言つたれど、松子より眞面目に拒絶されて頗る間が拔け、手持無沙汰に立ち去りし後は、一人にて椽側に座蒲團を進め、東の方を一心に凝視て居たりしが、覺えず玉のやうなる手を擧げてパチ〳〵と拍きぬ、それと共に各所の座敷々々よりも拍手喝采の音響き渡りぬ。

眞を溶せしやうなる大月、小山と小山との間より見ゆる大森沖の眞中より、潮と共に湧き出で波を破つて徐々天にさし昇る海は月光を浴びて始めて紅色を水天の劃るゝ一點に染め月一竿の高きに在る時は、水面黄金の碎けて流るゝ如く、月色漸く白からんとすれば、海上の光景も亦忽ち一變し、波濤の動くまにまに、銀龍の空に望んで飛揚せんとするものゝ如し。

松子は先刻より月光の美に精神を奪はれ、恍惚として空と海とに心を寄せたりしが眼を一轉せば先程までは闇かりし底前忽ちにして宛然白晝、屋根に載せある螺の殼に珍らしき光耀き、彼方へ此方へ架しある廊下の黒塗の屋根は冬の旦の置霜よりも冴え渡り、庭に植えある女松、男松の緣にも、月の雫を享けて露の色を添え、蒼白な煙を罩めたる風情、畵も及ばず、筆も及はず。

好い月ですね。と唐突に水野女の後に衝立ちながら聲をかける。

オヤ、これは失禮でした、ツイ迂濶して居ました、餘り月が好いもんですからと言ツてフイと男の姿を見上ると、すつばり奇麗に修飾をして髪から香水の雫が滴りさうなり。

さ、どうぞお這入り遊ばせ、と松子は椽側より座敷に這入りて護謨皮の座蒲團をすゝめる、水野は尙ほ立ちて空を眺む。

好い月だ、實に無類だ。

本當に好い月でございますねへ、こんな好い月は生來初見でございますよ、ほんに好い月だこと。

松子も椽側に出て男と立ち並びぬ。

田邊さんどうですね、ちと散歩なすつちやァと、水野は女の顏をヂロリと見る。

散歩‥‥‥‥どこへ、

この山上の本門寺には非常に月の眺に好い場所があります、こゝの客も大抵そこへ出かけた樣子です、どうです納涼かた〳〵散歩しやうぢやァありませんか、丁度此位月があがッた頃が最も佳境です、さ、これから同伴致さう。

と男は促す。

松子ハイと返事をしたが、此男と一緒に月見に行くは好ましからねど、折角の勸に無碍に斷りもならず、また其場所には大勢月見の客もあるとの事ゆゑ、男の言葉に從ひ、ちよいと帶を〆めなほし、團扇片手に、この二階を降りて二人打連れ立ち、月影を蹈みつゝ本門寺へ昇り行きぬ。

五重塔の側は樹木疎なれば、月光地を照して蟻の這ふさへ目にあまさねど、これより少し歩を進めは、古杉老檜參差として、枝を交へ葉を重ね、晝さへ暗きに夜は殊更に陰氣を籠め寂しきこと限なし。

田邊さん氣味が惡いでせう。

と今まで二人並びながら何だか無言で、ゆらり〳〵歩を移す水野は言葉を發しぬ。

いゝえ、何も氣味の惡い事はありませんよ、能く延びた木立ですことねへ、こんな木立が光明館の庭にあつたら好いでせうのに。

と女は答ふ。

何故です。と水野問ひぬ。

でも彼宿の庭は木立の少いせいか、座敷に朝日が差しこんで熱いやら、まばゆいやら。

ナニ、それは飛んだ事、僕は今でさい庭木が多い位に思ふ、あのそら、貴女の座敷と僕の座敷の間にある、ニユーッと出しやァばッた松の木さ、彼木が何時も僕の眼前を邪魔ァするから、時によるとたゝき切りたくなる實に邪魔な木だ。

言ひ終つて水野は暗を透して女の顏を、さてどんな返事が出るかと待つて居れど、何の返事もなし、何の反響もなし。

水野さん、月見をする所はどこでございますね。とそれから稍暫時散步してから、女の方から

言葉を發しぬ。

月見の場所、ナニ、ツイそこ、今にそこですと頗る男は曖昧な返事をしながら、石段の左手に寄つたちよとした東屋のある處へ來て、こゝです月見の名所は、これを月見の茶屋とかいふさうです、ア、好い月だ、と水野出鱈目をいふ。

へゑ、こゝが月の名所でございますか、と女怪氣に問ふ。

さうです、この東屋を御覽なさい、雨風に曝されて見る影もないやうだが、此柱は何とかいふ木で其腰掛の欄は櫻の皮のまんまで、屋根は胡麻竹で葺いてありますぜ、どうです洒落て居ませう、晝間能く御覽なさい。

月見の方々は誰も居らつしやらんやうですねへ。

ハア、どうしたらう、もう歸つちまつたのか知らん、マア其腰掛におかけなさいそして緩り月を見ませうや、と水野は手に持つ團扇で腰掛の塵を拂ひ其上に團扇を置きて、さお松さん、此上におかけなさい隨分汚れてるからと言へど、いゝえ、もうと團扇の緣を口に當てゝ默然たり。

(三)

水野は厭味な笑を含み、さう遠慮をしずに、此處へ來玉へ、好い風が來ますよ、僕は貴女に密話がある、丁度好い機會だ。

水野さん私は甚だ失禮ですが、浴後に餘り涼しい風に吹かれましたせへか、急に身體が寒氣がします、御一緒に歸らうぢやァございませんか、貴話は緩り貴下のお座敷で承りませう、私が貴下の座敷に參りまして緩りね、さうしませうや、と松子急に調子が輕くなりぬ。

水野は首を傾け、僕の座敷で、と口の內にて二三度繰り返せしが、よし、それでもよし、ぢやァお松さん、僕の座敷で……ア、僕も寒氣がして來た、もう餘程遲いだろう、と懷中より時計を取出し、木の間より洩れ來る月影に透し見て、オ、もう十時近くだ、どれ、お松さん歸らうと、腰掛より立んとせしが蹌踉くと女の方へ倒れかゝる途端にお松の手をシッと握り、ア、危ない危なかつた、搆ふまい、お松さん闇くて危ないから僕が手を引張つてあげる、さ、行かうと足を踏み出せば、女も引るゝまゝに手を振りほどきもせで、二人袂を摺り合はせ宿の光明館へ。—

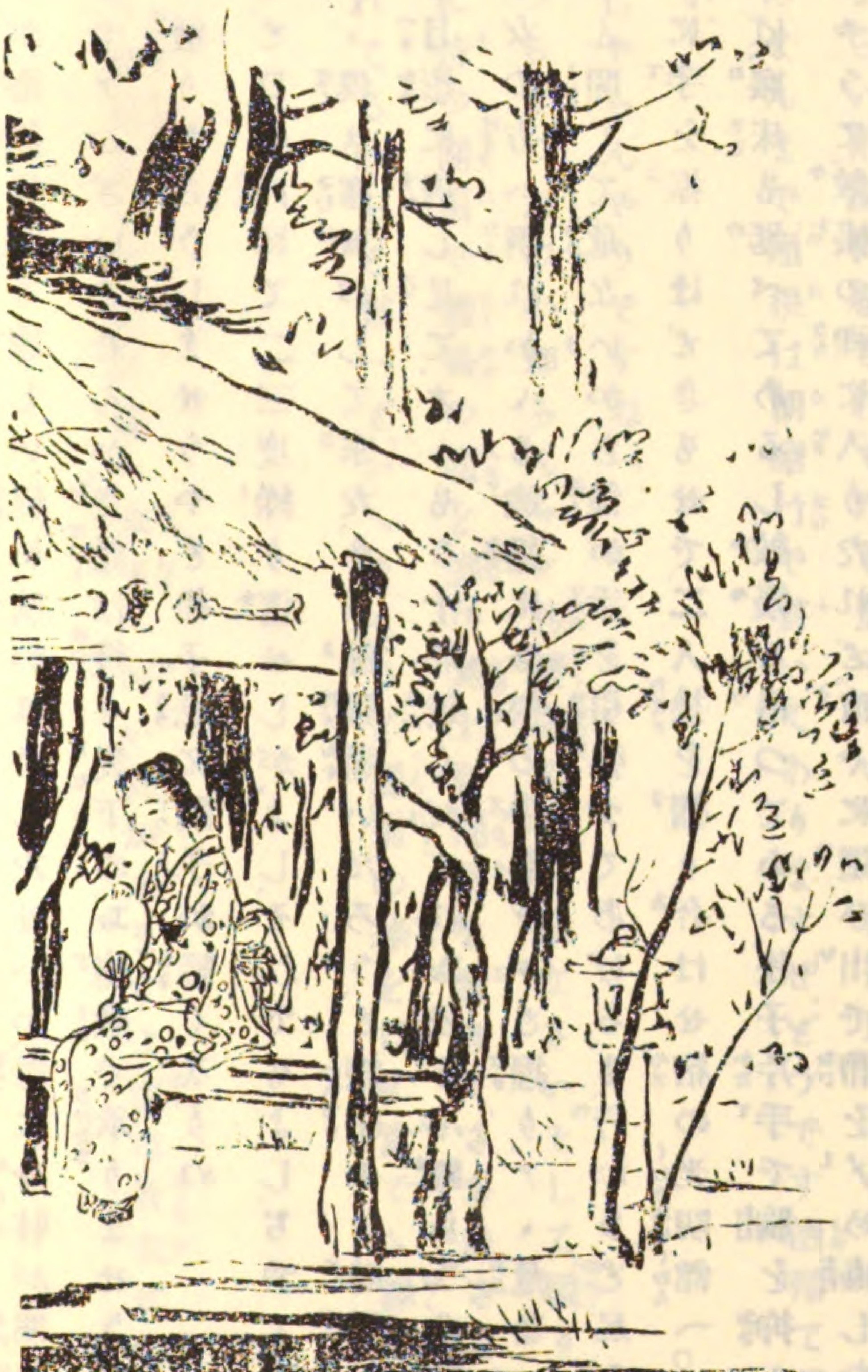
物思氣に我座敷へ來て見れば、寢床も延べてあるし、蚊帳も吊つてある、松子片手で胸を抑えてありしが俄に思ひつきしやうに、蚊帳の裡に入りたれど、直ぐに這ひ出で帶をメめ直したれば、約束せし男の座敷へ行くか、長廊下を降りたり降りたれども水野の許へは消息なく、寢られぬ累氣に今少々散步すべしと宿へ斷り置き、斯館の浴衣を着たるまゝ何方ともなく立ち去りけり。

* * * * * * * * * *

月は中空にかゝりて隈なく大地を照しぬ、千草にすだく虫の音を止め、道邊の草露を踏みわけ

本門寺の方より大森停車場の方へ裾ばら〳〵涼風に吹かせて唯一人急ぎ行く、若き婦人は田邊松子。

水野から夜陰に本門寺に連れ出され、あぢに搦んだことを聞きては、恐くて恐くてたまらず宿へ歸りても、政子の不在中夜間にどんなことがあらうもしれず、と松子は蚊帳へ入りても身體がワナ〳〵震へて、寢つかれる所でなし、いつそ東京へ歸つて仕舞が安心と、かく心を決して宿へも知らさで、本門寺の道へ出でたるに、はや十時過なれば人待腕車のなきゆゑ、我と我心を勵まし、往來稀なる野道を一生懸命可弱き足にて心のせくまゝ、飛ぶが如くに走り行く。やう〳〵八景園の



下へ來たれば、大森停車場內には鈴を振る音頻なり、それでは間に合つたか、こゝへ來ればもう自宅へ着いたも同じ事だと先づ心を落ちつけ、褄形の挿櫛で鬢の亂髮を直し、急ぐ心を抑へつゝ靜に停車場に至れば、はや二三軒の休憩茶屋戸を閉ぢ場內閒として聲なし。



松子は切符賣口より青切符を受け取り「プラットフォーム」の腰掛に腰を卸し、急しかりし呼

吸と烈しかりし胸の動悸漸く靜ならんとする時、河崎の方面より京濱間の最終列車遙に赤色の燈光を示し悠然煙を吐きて進み來る

同時に本門寺の方より鐵道踏切を矢の如く過ぎ行きたる一輛の腕車あり、梶棒停車場に一轉し、乘れる男はあはたゞしく腕車より飛び降り、あはたゞしく上等の切符を購ひ、あはたゞしく「プラットフォーム」に來りぬ、

松子何心なく來りし男を見、ハッと心の波を驚かし動悸は急に高まりぬ、お松は俯視きて言葉なし。

男は冷笑を帶び血走りし眼をつるし上げ女の姿を睨みつけてこれも言葉はなし。

汽車は來れり、お松はこれに心づき腰掛より身を起して客車に入らんと欲すれど男の入らざる所に入らんと、先づ男が入るを待つに似たり、男も女が先に入りて後身を處せんとするものゝ如く、二人互に遲れて乘らんと逡巡して居る。

早く、早く、と車掌の迫き立つるに、松子は中等の室の戶を排して身を投じたり、續いて男も黃色切符を口にくはへて女が入りし中等室へ

中等室の橫手の腰掛には、一人の客あり脊廣の洋服の上に塵避の外套を着、手提革鞄の上に「パナマ」の夏帽子を載せ、身を橫に延ばして眠り居たるが男女の乘客が其室へ入り込む物音に眼をさまし、急に身を起せしが衣嚢より「カメラ」を摘み出し、蠟洋燧の火を點けて、再び身を

横に倒し、双眼を瞑りて煙草を燻らせり。

お松と入り來し男は正面に對向ひぬ、男は巻煙草を吹かしながら女の顔を睨みつけ、女は顔を横に反向けて身動もせず。

滊車は進行し始めぬ。

オイ、田邊さん、お松さん、君は餘程虚言つきだね。と聲を懸けても女は返詞なし、

君は顔にも似ない、大虚言者だ、あきれ返つちまふ、大虚言者。

と男は一層語に力を入れていふ。

水野さん、私が何を虚言をつきました。と始めて松子聲を震はしていふ。

何をッて、現在虚言をついてるぢやァないか、君は何故僕をだしぬいて歸る、誰も取つて喰ふたァ言やァしないぜ、あの位約束して居ながら、君は今夜僕の處へ來る筈だが。

急に要事が起りましたから…………。

女に半分言はせず、水野顔を眞赤にして、急に要事もないもんだ、全躰君等は僕を馬鹿にしてる、君は僕と是非夫婦になりたいと言ッた、イヤ確にお政さんから聞いた、僕は幾度も念を押したが、それに違ひないと言ッた、課長さんの奥様の仰しやるとだから、女郎や藝者ぢやァなし、よもや虚言ぢやあるまい君も傍で聞いてたぢやァないか、君は僕と夫婦契約をしながら、今更薄情もないもんだ。

でも私ァ貴下と夫婦になる契約をした覺はありません、そんな事は知りませんよ、貴下大概失禮を仰しやい私ァ他家へ嫁く身です、そんな事仰しやれらると私は迷惑します、貴下私へ何の怨恨があつて……………。と松子の双眼涙浮びぬ。

ナニ他家へ嫁く身、それも虚言だ、それなら僕がまだ獨身かと尋ねた時、一人だからこれからどこか緣があつたら嫁くとお母さんが言ッた時、君はなんで默ッてた、よしんば他家へ行く身でも、君がこれほど輕薄な女なら僕も處置がある宜しい、見事其緣談を打破して見せる。

かく水野は憤怒の詞を發し、身をかへして車窓を卸して唾液を吐けり。

松子は小さくなりて一方の隅に身を寄せ居たりしが、滊車品川驛に着し品川品川と叫ぶ車掌の聲に、松子男が向の窓外に首を衝き出して知らぬ間を幸ひ急に身を起して此室を降りあはたゞしく品川停車塲を出で、詞せわしくそこに客待の車夫に向ひ、あの車夫さん、有樂町まで大急で乘車代は幾許でもあげるから。へいと車夫は手早く女を乘せ、八九間も駈け出すや、水野はあはたゞしく追かけ來り、其車止めろと叫びぬ。

（四）

車夫さん、好いからやつておくれ。とは前なる車なる上にて女の聲。車をやつちやァ不可、止めろッたら止めろ、オイ車夫。とは後より追ひかけ來る男の聲。車夫はどちらにしてよいやら、躊躇して梶棒を止めやうとする、好いからおやりよ、酒代をタントあげるから、早く、早くと松子

は車の上にて氣を燥つ、

此一聲に車は矢の如く走り出せり、アトより水野は車に追ひつかんと駒下駄の音高く、暫時の間は高輪の街道を車と人との競走。

車の上なる松子は恐しさに上氣せあげ、動悸耳皷烈しく、後より追ひ來る男を回顧る勇氣もなく車の縁にしがみつけども、今にも後より幌を引掴まれん心地せられて心中戰々、車町の高輪分署の前へ來るや、車夫さんちよいとこゝへ止めておくれと車を止めさせ松子はひらりと車より飛び降り、分署の内へ馳け込みぬ。

署内の巡査は皆々驚き、何です何事ですかと問へど松子茫然して返詞なく、表の方へキヨロ〳〵眼を配り、心の落つかぬ所は狂氣の風情。

警部らしき人、此躰を二階の上口より眺め居たりしが署員に命して松子を一室に案内せり、やがて呼鈴の響聞えぬ、小使其室に入りしが直ぐに立ち出で、一人の巡査を呼び入れぬ、巡査は室に入りて二三分、室外に出で帽子おつとり品川の方へ急ぎ行けり。

三十分許を經て巡査は立ち歸りて、再び警部と松子の居る室に入りしが、警部は松子を室外に連れ出し、もう安心なさるが好い、巡査を貴宅までつけてあげやうと松子を門前に待ち居る腕車に乗せ、後に巡査一人、これも乘車にて麹町區有樂町なる松子の家へ向ひぬ。

* * * * * * * * *

松子が自家へ着きしは、其夜の一時過なり、兩親は娘がこの眞夜中に巡査に送られて來たりしに驚きたれども、こんな事を餘り近所へ聞かせたくなきゆゑ、成るべく靜に巡査とも應接したるに巡査より別に申し渡しもなく、本人より御聞われと送り來りし巡査は立ち去れり。」

一旦寢靜まりし田邊の一家、俄に洋燈の光を大きくし、松子を父の座敷に呼び入れて、今夜の次第を尋ねしに、松子は四五日前から今夜まで、光明館にてありし一伍一什、洩なく物語りければ、父明は礑と膝を拍ち、さ、今夜のやうな事があるによつて、言はない事ぢやァない、己はこんな事があらうも知れんから、お政さんと一緒に遣るなァ感心しなかッた、オイお春、己があれほど不贊成を唱へたぢやァないか、輕率な事をするお政さんだから、不可、不可と止めたけれど、お前が承知して志まつたもんだから、今夜のやうな大事件が起つたのだ、馬鹿々々しいなァ、

でもねへ、奥さんから、あんなに強て仰しやられると、さう／＼も斷られない、私ァまたこんな事が起らうとは夢にも思ふなかつた、どうしてまァ、水野とかいふ奴と懇意になつたもんでせう、と妻君春子は誰に問ふでもなく問ふ。

己が知つたことぢやァない、何しろお政さんが、課長さんの奥樣にも似合ないお口輕だから、起つたことだ、全躰一緒に遣るのが惡い、松は當分大切な身躰だよ、お前此の始末をするが好い、と明は吐月峯を煙管でポン／＼はたく。

始末するてへ貴下、もう出來た事だから仕方がありませんがそれでも娘が異見と謂て置には
でもなつた事なら隨分面倒ですが、言はゞ先方が勝手で亂暴をしたんだから、此方に罪はちつともありやアしませんよ、此事を世間へ知らせずに置きさへすりやア、お松の迷惑になることもありますまい、と春子は松子が俯視いて泣いて居るのを見て、お前そんなに泣くにも當らない、默ッて居さへすりやア、圓く治るよといふ。

ナニ、どうしてさう行くものか、まアよし、今夜はもう遲いから明日の事にしやう、さ、早く休んだが好い、己は眠たくなつた、と父は妻と娘とをせき立て臥戸へ入らせたり。

其翌朝、田邊春子は娘の松子を同道して、本郷弓町なる高梨課長の家を訪問けるに、妻女政子は池上へ赴かんと仕度の最中なりき、春子か娘をつれて訪ひ來しとの下婢の取次。客間におあげ申せとあるに、下婢は二人の客を一間に導きぬ。

どうも大層お待せ申しました、と例の輕い調子で、唐紙を押し開け來し政子は、松子がキチンと母親の下手へ座つて居るに吃驚し、オヤ、オヤ、オヤ、お松さんぢやアありませんか、こゝへどうして、私アまたお孃さんを連れて入らしたといふから、御妹子さんの方だらうと思ッてたにこゝへ、まアどうして、いつ池上から歸りましたへ。

松子は禮儀をして下を向いたきり、春子は聲をひそめ、實は此娘にちつと間違が起りましてと、娘より聞き及びし話を落もなく物語りぬ。

春子が談話の內にも政子は驚きて、思はず膝を進めしが聞き終りて、ハ、ァそんな間違が、それは飛んだ事、本當にお松さん、飛んだ御災難でした、水野といふ奴はそんな厭味のある厭らしい人間とは、ツイ〳〵知らないもんだから、うつかり心を許したら、こんな事になつて、第一此私が濟ない、年甲斐もなく私が先に立つて、あんな男と交際を始めたから、ァ、私が惡い、お松さんどうぞ堪忍してください。

どう致しまして、併し此娘も御存知の通りもう嫁入の約束も出來て居ますし、此事がもし世間へパッとしますと此娘のために善くないと思ひますからどうぞ內分に願ひたう存じますと春子は念を入れる。

ハァ宜しいとも、ハァ宜しいとも元はと言へば私から起つたやうなもの、必らず口外しない若し又此事が外から世間へ知れたとつて、私はどこまでも出てお松さんの潔白を立てゝあげる積だから安心していらつしやいとの政子の言葉に、母娘も大きに心をやすめ、此日は晝飯に鰻丼の馳走になり、片日影になるまで女同志、談話のいろ〳〵を盡して我家へ歸りぬ。

（五）

夫の夜より一日經ち、二日經ち、三日經ち、五日經ち、七日經てども、松子災難の事誰も知るものなかりければ、田邊一家は漸く胸を撫で卸し、それとはなしに一夜祝盃を擧げたり。

松子が嫁すべき家は、赤坂新町にあり、松子が百年の苦樂を契る男は、高橋辰雄と呼び、麹町區

飯田町にある中等教育を施す某學校の教師として理學を擔任せり、まだ二十五六の青年なれども、教授に熱心なると品行の方正なるとにて校の內外に評判よし、六十に近き老母を有するの外、父もなく兄弟もなし、赤坂の家は老母と辰雄と、玄關番の書生と下婢一人都合四人の生活にて一つ足らぬ所はあれど此秋には松子といふ新婦加る約束あれば、此家の和樂は眼前に近よりぬ。

高橋家と田邊家と婚姻を結びしは、昨年松子の父明が、辰雄の學校に教員たりしことある緣にて伊藤某の媒介にて目出度一儀調ひぬ、それゆゑ辰雄と松子とは數々詞をかはし、互の人物も能く知り拔きたれば、互に夫となり婦たらんことを樂みける。

夫の事件ありて十日ほどを經たる或夜、媒介人伊藤有樂町の田邊家へ來りて、主人明と何か二時間餘も密々會話を爲して立ら歸りぬ。

明は妻春子と娘松子と、來客を玄關まで見送り、平生ならぬ顏色にて無言のまゝ、我居間へ入れば、春子も續いて明の傍へ來り、貴下どうか遊ばしたのですか、大層長い話でしたね、高橋の事でございますかと問ふ。

明は片手で額を抑え、アヽさうだ、もう破れかぶれ、愈々破談だ、と大息をつく。

何ですと、破談、そりやアどういふ譯で伊藤さん何と申しました、と春子膝を進めてこれも血相を變へたり。

先方の言分は何でもない、辰雄さんはちと志があるによつて、折角結納まで取替したが、五六年、婚禮を見合せたい、ついては一先づ松の嫁入を破談にしたいといふのだ、必らずあの事件が知れたに相違ない。

知れてもよいではありませんか、こんな時こそ高梨の奥さんを證人に立てゝ立派に松が潔向を立てゝ貰へば、先方もさつぱりなさるといふもの、早速さうしませうではありませんか。「ナニさうは行かん、先方も他の事情で婚禮を見合するといふし、これが一旦嫁入した後で、松が突返されて來たら、十分其理由が分らなければ受取られないが、ナニまだ約束ばかりだ、松も初嫁入に強賣も志たくない、ナニ打捨ッて置け、高橋よりも十倍好い處へ嫁にやる、明は强て自分で力をつけて自分を慰むるが如し。

それでもね、さうはいけませんよ、だがどうして此事が知れたらう、水野めが仕業か、それとも警察署から洩れたのかね、貴下どうしたんでせう。そんな事は然で研究する問題で貴下伊藤さんへは何と御返事なさいました。いづれ御返事を致さうと言いて置いた。それぢやァ松の了簡もありませうよ、私から能くいろ〳〵相談をしてから、それからの事にしませうよ。松の了簡ももうこうなつちやァ不必要だ、たゞ男らしく承知したと答へさへすれば好いのだ、卑怯な事は志たくない、松にもさう言ふが好い、と聞かぬ氣の明は飽まで剛情、松子は何事ならんと襖の影に身を潜め、内の話の樣子を聞き居たりしが、漸次に顏色變り行きて凄味を

習ひ、暇請すはりて、眠りもせず、ぶら／＼歎ふ長居、おた／＼敷く昔、松子嬢を嘗みがめて暇をつぶりぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

土用は過ぎたれど殘暑堪えがたき八月下旬、高橋辰雄は本郷の方へ用事ありて午後五時頃、永田町華族女學校の坂下に降り流るゝ汗を厭ひて、白地薩摩絣に黒絽を羽をりし衣服の袖をまくり、山王下の交番所を過ぎ、日吉橋を經て我宅へ歸らんと三四間歩みしが、向より淡御納戸の斜切棒縞の明石に小豆地に楠玉模樣ある繻珍の丸帯を品よく締め、手につぼめし蝦茶色の丸形蝙蝠傘を持ち、わつさりと束髪に結ひし乙女此方へ向つて歩を運びぬ。

此方へ來かゝりし乙女は、漸次に辰雄と近くなるや、急につぼめし蝙蝠傘を開き、辰雄と遠く隔り傘を傾けて早足に行き過ぎんとする。

お松さん、貴女にちつと用があります、ちよつとお待ちなさいと男は聲をかく。

どうぞ、御免遊ばせ、と女は一層早足に逃げんとする、さうしたものではない、ちつと話が……こうと、ア、此の山王へ登つてちつと休息しやうぢやァありませんか。辰雄は女の傍に進み寄り、暫く御目にかゝらなかッた皆さん變事はありませんか。

松子は傘をつぼめ、はい皆達者で居ます。それは結構、さ、山へ登らう。貴下私と御一緒に御迷惑ではございませんか。ナニ搆ふものか、さ、入らつしやい。

男女の二人は池の汀より登り登りて丘の絶頂に達し、相對ひて切株の上に腰をかけ、少時四方の景色を見廻しぬ。

お松さん、私は貴女へ濟まない、結納まで取かはして破談をするなんて、イヤそれが却つて貴女の幸福かも知れんが唯私は良心に對して濟まない。辰雄は詫入るやうにいふ。

どう致しまして、みんな私が不心得からでございます、私はそれまでの緣と諦めます、と松子聲低し。

ナニさうではない、實は私が志があつて五六年婚姻を延ばすと言ッて破談を願ッたは政略です。實は貴女が池上の一件からです。

それは能く存じて居ます、だが何して貴君の君へ還入りました。其夜私の學校の校長が滊車に乘つて居て貴女の名前まで覺えて居つて、私の宅へこれ〳〵だから貴女の關係を破ッた方が好いと、母と私へ忠告したから、叔父と母がそれは大變だと言ッて、いづれ池上で起ッた事だらうと、貴女が池上へ避暑に入らつしやつた事を知つてるゆゑ、其後光明館に參つて、貴女の樣子を尋ねたら、奇怪な返答をしたもんだから、到頭破談の結極になつたが、私はどこまでも貴女の潔白を知ッて居るが、母や叔父に逆ひもされぬ所から、心にもない事になりました、お松さん、どうぞ悪く思つてはいけない、と辰雄赤心をあらはしていふ。

私はもう夫の事の分踈は致しません、貴下が私の潔白を知つてくださいますのは、眞に嬉し

う存じますけれど私はそれまでの運と諦めます、辰雄さん私ほど不幸なものはございません、と松子は曇聲。

ナニ貴女が不幸なもの、そんな事があるものか、これからどんな好い所へでも行かれる、私などは實に不幸……實に不幸です、……必竟貴女と破談となつたも、實は貴女の利益を思ふし、一は此不幸の身を厭ッて校長や母の言に從ッたのです、それでなければ誰が何と言ッても飽までも貴女と一緒になりたいが、實の所は私は妻を迎ふる心はありません。辰雄力なく勢なく打嘆つ。

ナゼ奥樣をお迎になりませんの、と松子は怪み問ひてヂッと男の顏を凝視めぬ。

此事は貴女にばかり打明ける實は母にも咄さないが、私は二三年内には必らず死んで仕舞ふ、イヤ其運命を有つて居ます、私は肺結核です、さ、お驚でせうが、事實だから仕方がない、一ヶ月はかりも前始めて發見しました學校の運動場で二合許も吐血をしました、それから四五日以前も丁度飯を喰つてた時、ムヅ〳〵とこみ上げて來たから湯呑に吐き出すと五勺も、血が、血が眞赤な色をして居た、母に知らせると心配の基と思ふから母の目を掠めて手早く其血を飲んで仕舞ッた。

と辰雄は一息つき、松子も茲に至りて眉を顰めホッと息をつきて男の話を謹聽しぬ。

それから内々で某醫者に診察して貰ふと黴菌が居ないから肺結核でないとは言つてくれ

たが、どうも自分では安心が出來ない、必らず結核だ、それに相違ない、まだ誰れにも話さないが、此分で行くと二三年の內には死んで死舞ふ、我事業中途にして死ぬるかと思へば殘念千萬だ。

辰雄は覺えず拳を握りて嗟嘆の聲を洩しぬ、松子は先刻よりの談話を聞き、もう胸一ぱいになりて、眼に淚さへ浮べて、辰雄さんそんなに力をお落し遊ばさないでも、たとへ結核でも直らない事はありません、私の知己にも酷く肺が惡うございましたが、田舍に引込んで療治をしたら見事に癒りましたものを、養生一つで直らない事は必らずありません。

イヤ其考はないではない田舍へ引込んで百姓でもしたら、幾分かの希望はありますが、それとはなしに教員を止めて牧畜でも遣つて見たいと、母へさう言つて見ましたが、家は元から士族だからお前になつて百姓になつては高橋家の不面目だとか何とか頑固な事を言つてとても駄目です、それかといつてこれ〳〵と事實を白狀したら、母がどんな顏して驚いて、どんなに心配するだらうかと、どうも私の口から出ない、また百姓をした所が、こんな弱い身躰から、自身一人の口を養ふことも覺束ない、そして年齒を取つた母へ苦勞をかけると思ふと心苦しい、矢張此職に居て…………ナニ一命をかけてさへ居れば、何も鬱々することはない、………だが酷いもんだ、神經のせへか三度の食事も旨くないため、これ御覽、一月許の間のこんなに疲せました、今に骸骨になつて仕舞ふだらう。

言ひつゝ男は腹部を推し開けば肋骨高く秀でゝ骨の數一ッ二ッと歴々數へらるべし。

松子は耐らずべたりと切株より地上にすべり落ち、男の膝に額を押つけ、やゝ少時、双方無言なりしが、女は瞼を赤くした顔を擧て、下から辰雄の肋をヂーッと凝視、貴下がこんなだと、私は破談になつたのが尚更厭でございます、と眼に持つ涙二行三行、堰を破つてばら／＼と頬に傳はりぬ、辰雄は矢庭に立ち上り、骸骨についてた所でどうなるものか、ハハハハと天を仰いて笑へば、傍の樅の木にありし烏一羽、皷翼高く彼方の森へ飛び行きぬ。

（六）

高橋家より破談を申し込みたれば、それに彼是と分疎して强て娘を押つけるは卑怯なりとて、田邊明は斷然破談承知の旨媒介人まで返答したれど、春子はどこまでも松子を高橋辰雄に嫁せしめたき心なりき、松子も同じ心なるべし。

松子は麹町山王臺にて面會したる事、談話したる事、辰雄肺病の事の外は殘らず母親に物語れば、春子は益々辰雄に希望を置き、どうにかして舊約を温めんと種々に心志を勞すれどもこれぞといふ名案もなし。

去りながら松子の話にては、夬の夜の事の知れしは、校長が松子と水野の乘り込みし汽車にありて、二人の樣子を見聞したるを、辰雄と辰雄の母親及叔父に知らし、それより破談となりたれど辰雄は松子の潔白を承知しをるからには、此上は老母の心を解く方法をなすに如く

はなし、それには自分か娘か高橋の奥樣か直接に面會して、池上光明館にての次第と、其夜の事を包まず明さば、老母の疑の雲の晴るゝこともあるべしと春子は松子にも其旨言ひ聞かせ、時機あらば高橋の老母に遇はんと心に懸けて居たりけり。

其後好き機會とてはなきに、はや殘の暑も去りて、桐一葉落ちて知る天下の秋、小春日和の肌加減よく人の心も長閑に返り、麻布界隈は花壇菊の名所とて雅も俗も杖を曳くもの多し。

田邊松子は芝葺手町の學校朋輩を音づれ其序に溝口伯邸内の花壇菊を觀、それより麻布西町なる今井邸内へ廻れば、黃菊白菊其他に數ある千代見草、おのがじゝ色を競ひ形をくらぶ、松子青竹の手欄に身を寄せ花の艶なるに心を奪はれ居たりしが、ふと傍を見れば、高橋の老母一人の下婢を連れて、花に魂を入れて松子のあるを氣つかず松子はハッと俄に胸轟き身を他の花壇に避け、こゝより老母の姿を見るに、半年以前一度面識ある確に高橋家の老母なりき。

松子は去るに去られず、在るに在られず、人群の裡に影を隱して老母に目をつけ居れば、やがて老母は下婢と共に邸内を出で、一本松の方へ杖を力に歩を運びぬ、松子は其後に一丁許も隔りて、老母の行くまゝに鳥居坂を登りて六本樹に出で、こゝより幽靈坂にかゝりぬ。

老母は坂の中途に至りて、杖に兩手を重ねて憩へば、下婢は風呂敷包をかゝへて後に衛立ち居る、

松子は思ひきつてツカ〳〵と老母の側に進みより、御隱居樣、いつも御壯健で御機嫌よう存じます、

老母は眼鏡越に胡亂氣に女の顏をシゲ〳〵と打見やりお前さん何誰でしたへ、ツイお見反申してホホホホホと笑ふ。

私は……………田邊松でございます。ナニ田邊松、田邊……………ハ、ア、花や、さ行かふ。

と老母行きかゝるを、松子は袂をひかへ、御腹立も御道理でございますが私は御隱居樣へ申し上げたい事がございます。

お前さんが私へ用のある筈はない、また用があるなら、道を踏んで來なさるが好い、さうしたら、お話も聞きませう、こんな道傍で、それだから私はお前さんは嫌だ、いつまでも卑怯なお前さんも武士の娘ぢやァないか、あつかましいこと離しなさい。

私は卑怯で貴老へお話を申し上げるではございません、私はもう〳〵何事も諦めて居ますけれど……………辰雄さんの身の上につきまして、たツた一言貴老へ申し上げたい事がございまして。

と松子は確り老母の袂を握りしめて放さず、老母は老の力一ぱいに袂を引たくり、辰雄の身の上もない、お前さんの世話にはならないよ、うるさい、側に寄つたら杖で擲りますぞ。

トツ〳〵と老の弱足を早めて行き過ぎる、松子は幵所へ茫然と立ちて二人の後影を見送れ

と、老母は回顧もせず、下婢花は再たび三たび見返りしが、やがて二人の姿は行手の森にかくれて見えずなりぬ。

(七)

高橋の老母と松子が邂逅せし翌々日の夕暮、樹々の梢も初霜に色を染め時雨のたびに衣を拔きかへ、人は袷を着るも肌寒きに身には垢染たる白地の單衣を纒ひ、髮も蓬に鬚髯疎に生へ見るさへ氣味惡氣の男、赤坂新町なる高橋家の玄關に來りて「頼む」と申し入れぬ。

何誰と同家の書生罷り出づれば、御主人御在宅なら是非お目にかゝりたう存じます。何誰です、と書生再び問ふ、イヤ姓名はお目にかゝッたら直ぐに分ります、どうぞお取次を願ひますと來りし男言へば、書生何だか氣味惡く、先生は少々病氣で休んで居られるから、又御入來を願ひます。イヤ御病氣なら御寢間でも苦しうありません、是非々々至急に拜謁を得たいと男なか〳〵動かぬ樣子に、書生はそれではと奥へ入れり。

暫時して書生立ち出で、それではお通んなさい、病氣で學校も引いて居ます位だから、長い話は不可と上へ案內すれば男は齒の歪がみし朴の木齒の下駄をぬぎ捨て客間へ通りぬ。

待つこと五分間許病氣中にて顏色蒼白の辰雄徐々唐紙を押して姿を顯すや、男は甲斐絹蒲團の上よりすべり下り、額を疊へすりつけ、貴下が御主人ですかと問ふ。

私が高橋辰雄です、どうぞ座蒲團へお乘りください、そして貴下は何誰でしたか、ツイ失念致

しました、と頭を垂れ居る男の顔を差し覗きて辰雄尋ねぬ。
男は漸く頭を擡げ、イヤ御存知ないも道理です、僕は水野角太郎と申す大罪人です、と又もや頭を垂る。

水野角太郎、水野、水野………と辰雄は口の内にて繰り返しぬ。

今日拜謁に出ましたは、僕がこれまで大罪を懺悔したく又田邊松子さんの潔白を立てたい積です、僕は池上光明館で松子さんに非常な無禮を致しました、本當なら僕は自殺でもせねばならぬ塲合です、全く僕が惡いので、松子さんには罪はない、實に清淨潔白です、併し僕一己の了見が惡いばかりで、諸方に迷惑をかけました、それがため貴家と松子さんの婚姻を妨げました、實の所は戀のならぬ意地から破談になつたといふ事を聞いて、昨夜まで好い意味だと喜んで居ました、所が昨夜始めて夢が覺めました、迷が醒めました。

水野の顔は朱の如く赤く、辰雄の顔は草の如く青し。

天罸、實に天罸です、僕は某會社に雇はれて居ました、身に不相應な驕奢をした末か、會社へ不義理が出來、危なく赤い衣服を着る所が、やつとの事に親戚には居られますが、平生が不品行ゆゑそれから誰一人、僕を信用して呉れる人はなし、途方に呉れた所から今月の始から郵便配達になつて此赤坂に廻されました、實に天罸です。

水野は傍に置きありし茶をグッと飲み干し、袂より汗染みし手巾を取り出して額に流るゝ

汗を拭きて語を續けぬ。

それでもまだ性根が直らないか、郵便配夫でありながら、松子さんから貴家の御隱居樣へ當てた書信を開封しました、開封どんな事が書いてあるかと思ッて、實はまだ迷の雲が晴れないで………。

辰雄は開封の語にギヨツと驚きぬ、此時老母は後の唐紙を明けて二人の席に進みぬ、水野は我を忘れ老母の來りしも忘れ、袂より開封せし書翰を取り出し、辰雄の前へ震へる手に差し出し、これを御覽ください此手紙を見て僕は始めて是迄の大罪を悔ひました、懺悔の心が起りましたと始めて老母のあるに氣つき、これは御隱居樣でございますかと又もや額を疊へすりつけぬ。

辰雄、其手紙私に見せておくれと老母は眼鏡を力に下婢が持ち來し洋燈の光に松子の書翰を照しぬ。

「一筆申上まゐらせ候きのふは觀菊のかへるさ無端も御姿を拜し御目障にやと姿影を匿し候へども、たゞ何となく名殘の惜まれて御跡を慕ひまゐらせたく一言申上げんと思はず無禮なる振舞いたし御怒に觸れ候返すがへすも禮なき段々あはれ不束者の愚さよとゆるさせ玉へ、去りながら妾一言申上げん事は申すもうたてき事ながら姿はもはや辰雄樣の事思ひ諦め候ゆゑあつかましくもあなた樣へあはれを乞ふ卑怯もあるまじ

く候妾はこれまでの運と疾よりあきらめ居り申候池上へ參り候不幸を今更繰返すも甲斐なき業と諦め居り妾は水野を露ほども恨みまじく又他人を恨むることさら〳〵なし皆妾が不束と不運より結びかゝりし辰雄樣との緣かくなり果てしは不運の極如何ばかり歎はしう存じ候へ去りながら妾は愚痴の源は御目にかけ申まじく候、くれぐれも申しあげたきは辰雄樣の御身の上にて候いつぞや山王臺にてふと辰雄樣と御目にかゝりいろ〳〵御情深き言葉を賜はり御心の中いろ〳〵御明しに相なり身に餘りて此上なく嬉しき事に覺え候辰雄樣はいびやうの兆あらせられ、吐血さへありきと聞く妾さへ腸千々に裂け候あなた樣の御耳に入らば嘸や御歎きの事と辰雄樣は飽まで御隱し遊さるゝ御心底妾これを忍びて此事を御しらせ申上まゐらせ候わけ一時も早く田舍へなと御引こみゆる〳〵御養生遊ばすやう祈り上げまゐらせ候はいびやうの人にて田舍へまかり元のからだとなりし人多く聞き及び候たゞ此事妾の口より一時も早く御しらせ申しあげんと思はず昨日のぶれいいくゑにも許させ玉へ、妾はもはや此世に望みなく世の中厭はしう相成候まゝ生れしふるさとへ退かめ妾は辰雄樣と二世の契こそなけれいつまで吾夫と思ひ居り候されど最早御目にかゝる事もあるまじく申し上ぐる事もこれ限りに候はんたゞ〳〵ます〳〵御壽命の永からんことと御内の末長く榮へ玉ふを蔭ながら祈り居り候辰雄樣にはあなた樣より宜しく御傳へ願上まゐらせ候さ

らばこれにて惜しき筆止めあら〳〵かしく

十一月二十五日　松子

御隱居樣

御もとへ

老母は讀み終りてホッと太息をつきこんな心懸よい娘とは知らなかッた、辰雄、私は明朝早々彼家へ行ッて松子さんへ御禮を言はねばならん、と水野に向ひこんな好い手紙をお前さんが開封しないもんならつゝ返へして仕舞ふ筈だつたに、と我子の方を向きそして辰雄、お前本當に肺病か、血を吐きましたかと老母は老眼に涙をたゞへて息子の青白き顏を打眺めぬ、辰雄默然たり。

（八）

見渡せば天地三白、一は四五百棟の茅屋の所々へ三つ五つ塗籠の土藏、一は每戶々々の前に乾ある張板の駿河半紙、一は此村落の中央を縱斷して流るゝ芝川、源を白糸瀧に發し、幾回か曲り幾回か舒び瀨となり淵となり漸くにして富士川に注ぐ、こゝ駿河國富士郡西山村の夏景色、他に白しといふは檐前に見る富士山の雪もなし。

淸流淙々と行き岩石水に觸れて聲ある邊、一町四面に擴る葡萄樹蜿々として地に滿ち天に蔓りぬ、葡萄の房は累々として蔓にかゝりて甘露地に滴たらんす、彼方に茅屋あり綠樹四圍

を廻らす、こゝへ住へる主人は日々鋤鍬を把つて幾千株の葡萄樹を養ひ、夜は書齋に在りて



植物を研究せり、細君は少さき娘と六十幾歳の老女と共に日々に幾百の鷄を養ふ、此外に下婢一名と雇男四五名。

五年前若夫婦と老母の三人玆に來りて住み、若主人が自づから日々開墾せし荒土は、いつの間にか美しき葡萄園と變じ、美はしき養鷄園と變し、年々幾百斤の葡萄、幾萬個の鷄卵を產するに至りぬ。

今宵は月明なる夜なりき、この一家は椽臺を葡萄棚の下に列べ、五年前の昔を思ひ出し、互に物語り物語られつ、主人も細君も老母も笑ひて祝盃を傾けぬ、少女も無邪氣なる笑を帶びて。

ア、月は歲々變らねど、五年前の悲哀は夢の如く消え去り、肺結核にかゝりし高橋辰雄、今は身躰健に四肢きび〳〵と太りたる葡萄園の主人、松子は世話女房となりて小兒さへ擧げたり、老母尙ほ健在なり。

松子が難儀を祟り破談となりて悲しき目にあひしも五年前、辰雄が肺病に罹りて必死を期したるも五年前、水野が零落して懺悔に來りしも五年前、眞に五年の月日一夢の如し。

五年前老母は水野の懺悔と松子の書翰に感じて、其翌朝松子の家へ到り、松子が好意を謝せども、辰雄が肺病となりたれば尙更松子を嫁になし難しと斷るを、春子は何も時の運なり、嫁入したる後病氣が起りしと諦むれば娘をやられぬことはなしと言ひ張り、松子も必らず田

舍へ退きなば、二三年の後には辰雄を元の身躰に直して見んと誓ひ、それまでは老母の附添にとて相談再び纒り松子は愈々高橋家の新婦となりけり。

此村へ住ゐてより二年の後、果して辰雄が身躰は舊に復しぬ、北里博士の診斷によればもはや黴菌はをろか、見事なる肺質となれりと、それより一年を經てはつと呼ぶ一女を擧げたり玆歳三齡のかはいざかり、今夜老母の肩に纒ひ戲れ、月の圓なるを見て不思議の笑を洩せば老母、細君、主人も共に賑ひ興しぬ。

白晝のやうなる月光を蹈み、土橋を渡りて此家に來り、下婢の案内に連れられ、麥酒三四本を手に提げ、ツカ／＼と椽臺近く進み來りし男は、水野角太郎なりき。

水野は其後全く心を改めて、某會社に辛抱し居りしが、今度志を懷き臺灣へ渡航せんと高橋家へ訣別に來りしなり。

（終）



本社電話番號七十番

發行兼印刷人 吉崎圓吉
編輯人 金子佐平
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

五二會全國品評會　**壹等賞受領**　明治二十九年五月

●御使用向●營業用●旅行携帶用●慰樂用●學校教授用及學術參考用其他種々

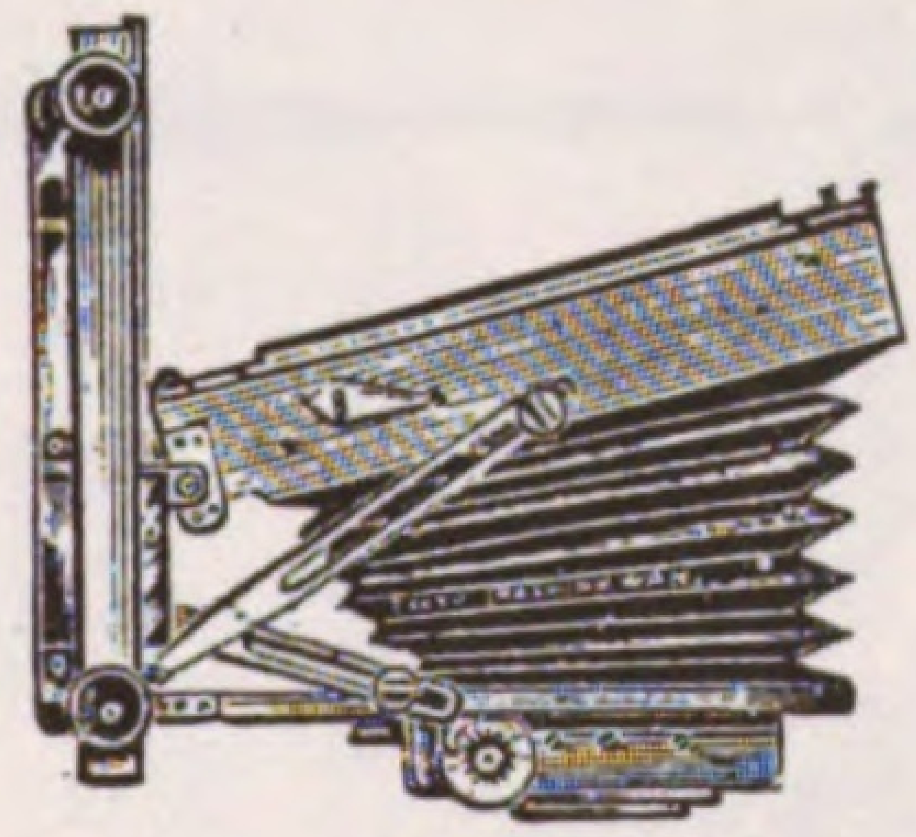
吾東京寫眞館より發賣せる輕便寫眞器を使用せんとするには從來毫も寫眞術の事柄に經驗のなき全くの素人方と雖も人物、景色、美術工藝品及其他諸種の寫眞を自由自在に且迅速鮮明に撮影し得る至極愉快なる便法にして方今内外貴顯紳士及學生諸君に非常の好評を博したる高尚有益なる良器なり仰き願くば大方の諸賢速かに一組を備へて寫眞術の眞味を試み賜はらんことを謹みて稟告す……

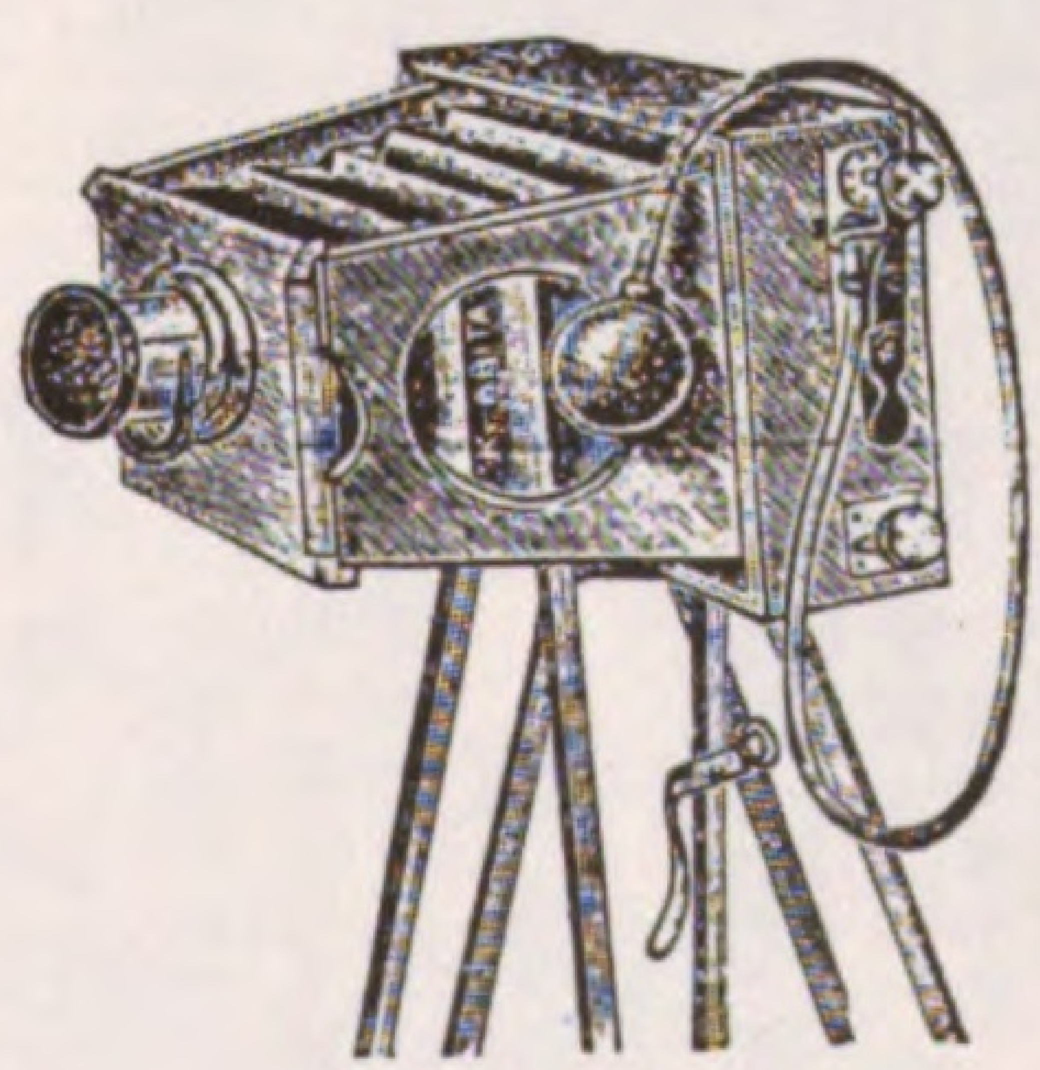
●代價は各附屬品共壹組(名刺形)金五圓●七圓●十圓●(手札形)八圓●拾圓●拾參圓●拾六圓●拾八圓●廿圓●廿五圓●廿五圓●三拾圓●卅五圓●四十圓●五十五圓●(二枚掛)廿圓●廿五圓●參拾圓●四拾圓●七拾圓●五拾圓●(カビネ)卅圓●卅五圓●四拾圓●五拾圓●六拾圓●七拾圓●八拾圓●百圓●百參拾圓●百五拾圓●貳百圓●外に八ッ切四ッ切半切全紙等數種▲右は玉鏡の品質と暗函の構造により斯く差異あり●遠隔諸君には方法の簡便なるものに一々圖解を加へ且非常の熱心と親切とを以て講話的に説明せし使用法書により御教授し萬一不明瞭の點あらば質問に應じ充分御教授の任を盡すべし

新形早取　**輕便寫眞器**

素人方にて手易く撮影し得る

○海軍省臺灣總督府御用品





東京新聞批評

廿九年五月十四日

●東京寫眞館の寫眞器械　府下日本橋區東京寫眞館にて發賣する輕便寫眞器は此道に經驗なきものにても人物。山水等を隨意に撮影し得る極めて愉快なる方法にして同館は斯道に大熱心なる結果益々世の信用を博し此程中も鳥尾子爵。前田五二會總監。内貴京都市會議長等をはじめ各貴顯紳士より續々好成蹟の證明書を送られ尚這般海軍省臺灣總督府軍事局等より買上の命あり爲に同館は一層奮發して廣く海外樞要の地にも陳列所を設け和洋兩製の寫眞器械を發賣する目的の由にて昨今其準備中なりと云ふ。

●▲(注意)器械壹組と稱ふは暗函、取枙、玉鏡、三脚臺は固より種板、臺紙、感光紙、燒枙、諸藥品使用法説明書等、一般の附屬品を取揃へたる名目なり尤も器械の甲乙種と大小によりては多少其品質を異にすと雖も先づ一組を購ひ玉はゞ原板法及印畫法に至るまでの必要品は全く具備するものとす……

○遠國へは小包郵便又は通運早達便にて遞送す……

●爲替は東京……室町郵便受取所……及其他諸銀行宛……

郵券二錢投じ玉はゞ＝定價明細書＝を送呈す

●●寫眞術開業望の御方へは營業上毫も差閊へなきやう無料にて迅速と懇篤に御教授す

●●御來館御購求の節は該器械を以て即座に撮影の上實見に供す……

東京市日本橋區人形町通田所町十八番地

寫眞器械問屋　**東京寫眞館**

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行